

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# DePOLA

でぽら

33

2007年  
秋冬号

特集

知恵を出し合って山村再生へ—  
**地域力をつける!**



本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。





やさか共同農場  
有機味噌



鮫川村大豆製品



コウノトリの郷米



大朝わさ菜種油



東瀬琴高校生の  
畜産加工品



平井ゆずの里製品

## 知恵を出し合って山村再生へ 地域力をつける!

## 特集企画に寄せて

### 昭

和45年に「過疎地域対策緊急措置法」が制定されて37年、3次にわたる特別措置法の制定で、過疎地域の生活環境の整備、産業の振興など、一定の成果をあげることができた。しかし現行の「過疎地域自立促進特別措置法」は3年後の平成22年3月をもって失効する。

新たな制度の創設に向けて当連盟は、国会・政府関係方面に「現行過疎法の失効に伴う新たな制度の創設」等の要望書を提出した。

おりしも、7月29日の参議院選挙では、台風並の風が全国に吹き荒れた。切り捨てられようとしている地方の不満と怒りが投票結果に現われたからだという人も多い。

人口の減少と高齢化は全国的に加速しているが、過疎地域においては顕著である。路線バスなどの交通機関の廃止、医師不足、耕作放棄地の増加、森林の荒廃、生活・生産基盤の弱体化がすすみ、多くの集落が消滅の危機に瀕している。

厳しい国家財政という名目の元で、地方は切り捨てられるのではないかとという地域格差を人々は実感し始めた。集落から子供たちの声が消え、ひとり暮らしの老人世帯が増え、里山も荒れている。しかし大都市東京と大手企業は栄えている。

**地**域に活力をつけ、いまこそ農山村を再生しなくてはならない。そのために必要なことは何かについて、過疎地域の人々は真剣に考えている。

自分の地域は自分達で守っていくしかない、地域のリーダーたちは強く実感しはじめています。

本誌33号では「地域力をつける!」という難しいテーマで特集することにしました。本誌が取材するまでもなく、各市町村はさまざまな施策を駆使し、住民も参加して地域の活性化に取り組んでいる。

そんな中で、地域の特色を生かし、知恵を出し合っ  
て努力を続けている地区を3つに大別して、取材  
した。

- (1) 田舎は楽しい」と地域の魅力づくりに取り組み、それを発信している地区
- (2) 自然環境を保全して特色ある地域の活性化に取り組んでいる市町や関係団体
- (3) 地域と都市、地域住民同志の「交流」を活力にしている町や関係団体

これらの地域には、地域の活性化に夢とアイデアを持ち、行動力があり、人々を惹きつける魅力あるリーダーがいる。その下には、農業や森林、自然の素晴らしさを身をもって感じながら汗流す若者や、生活者の視点と実践的アイデアで事業に当たる元気の女性たち、田舎暮らしを楽しむ都市からの移住者がいる。46年ぶりに大空に舞ったコウノトリのヒナ、甦ったヒノキの集材材も、期待される仲間たちである。

地域への限らない愛と誇り、森や水の自然と文化・生活等を官民一体で共生し再生していくことが、いま特に求められていると実感する取材であった。

「ではら」編集部  
(財) 過疎地域問題  
調査会



大正町森林組合で製作するヒノキ間伐材のダイニングテーブル、チェア

知恵を出し合って山村再生へ——地域力をつける!

●特集企画に寄せて—— 2

## ■田舎は楽しい! 地域の魅力を発信



やさか共同農場でトマト栽培をする若者たち

- ・ **山村を有機農業で元気にする**  
地域資源を循環する「(有)やさか共同農場」(島根県浜田市弥栄)—— 4
- ・ **自立の村が選んだ再生への道**  
鮫川村の農村交流活動(福島県鮫川村)—— 8
- ・ **女性の目線で三セク鉄道と地域を支える「肥薩おれんじ鉄道」**  
(熊本県八代市他)—— 12

## ■自然環境を保全して地域の活性化

- ・ **人とコウノトリが共生する豊かな地域づくり**

「小さな世界都市・豊岡」の挑戦(兵庫県豊岡市)—— 15

- ・ **菜の花から資源循環型社会を**

「INE OASA」の菜の花プロジェクト

(広島県北広島町大朝)—— 20

- ・ **企業と提携して森林の整備と木材の活用** 大正町森林組合&ココヨ

の「結の森」(高知県四万十町大正)—— 23



「肥薩おれんじ鉄道」沿線の魅力を語る岡田さん(右)

## ■「交流」を地域の活気に

- ・ **「食」「農」の夢を育み、地域産業の一翼を担う**

町立東藻琴高校の取り組み(北海道大空町東藻琴)—— 27

- ・ **秘境・古座川溪谷の自然と共に**

ふれあい拠点「ふるさと定住センター」[平井ゆずの里]

(和歌山県古座川町)—— 30

- ・ **「ものづくり」仲間が集う**

高原の里 開田高原が移住者に

人気の訳(長野県木曾町開田高原)—— 34

## INFORMATION 38

森林で心身をリラックス 全国の「セラピー基地」/畑作・酪農の実習生募集(北海道天塩郡遠別町)/農家に宿泊して農作業(飯田市ワーキングホリデー/新しい旅のかたちを楽しむ 5地区で始まった長期滞在/世界自然遺産屋久島の自然体験セミナー

(財)過疎地域問題調査会からのお送り 39  
編集後記/奥付 39

## 「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめて、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

## ●表紙写真

左上/高知県大正町森林組合「結の森」。間伐材は残らず里へ運び出す  
左下/菜の花畑を体験学習の場。大朝小学校の児童たち

右上/田んぼで採餌する自然放鳥されたコウノトリ(豊岡市)

右下/地域の人と都市からの移住者が野菜畑で鳥害ネット作業(古座川町)



開田高原で木曾馬の世話をする宮川さん



①

# 山村を有機農業で元気にする

## 地域資源を循環する「有やさか共同農場」 (島根県浜田市弥栄<sup>やさか</sup>)

過疎と高齢化で早くから休耕田が目立った中国山地。この山間部で農業の魅力と価値を提案し、地域の再生をめざしてきたのが「やさか共同農場」。35年前、豊かな自然の中で安全な農作物を作っていくと都市から4人の若者が入村してきた。棚田の休耕地を耕して高原野菜を栽培、牛豚を飼って堆肥をつくる。農業ゼロの有機野菜や添加物のない味噌、ジュース等は都市の消費者に直販され、農業をめざす若者の研修、地域の人たちの雇用の場として人気を得ている。

### 都市から来た若者たちの挑戦

島根県西部、中国山地に位置する旧弥栄村は85%が山林という起伏に富んだ山村地帯。中でも有限会社やさか共同農場のある三里地区は、斜面を利用して棚田やわずかの野菜をつくってきた山間部である。冬は雪が積もり気温もマイナスになるため、人々は出稼ぎして細々と営農してきた。

そんな地区に、昭和47年に大阪・広島に住



トマトの苗植えをする青年たち。左から吉村、山崎、高橋、佐藤の各青年

む若者4人が入村してきた。高度経済成長に湧く一方で公害の多い都市生活に疑問を感じた青年たちだった。彼等は雑草が背丈まで伸びる休耕田を開墾して野菜をつくり、広島等へ直販、やがて牛や豚を飼って有機複合農業を実践していった。57年には役場や地域の協力を得て、「山の暮らしを体験しよう」と体験農園を開園、都市と農村の交流事業の先駆けとなった。

さらに農家が農閑期につくって来た味噌に注目、地域の人たちの力を借りながら無添加の味噌づくりを本格的に手がけるようになる。その間「58水害」で畑も家も大きな被害を被る等の苦労も多かったが、60年には消費者の融資で味噌製造の新工場を建設、原木4000本を植菌して椎茸生産も始まる。同時に、新規就農者のための研修制度や都市の子供を対象にした「こどもコミュニケーション学校」も開催し、山間部は農業をめざすE・Uターナーで活気を呈していった。当初は異質な移



三里集落は斜面が多い(事務所前から望む)



やさか共同農場事務所(右)と野菜や味噌の加工所(左)





▲ほうれん草を整えて出荷準備をする従業員たち



▲味噌の袋詰め作業。右下は三浦さん



▲味噌の熟成度をチェックする堀江さん(左)



住者として敬遠していた地域の人々も、いつかキョードウタイと親しみをこめて呼び、共働する関係が出来上がっていった。

事業拡大に伴い、平成元年に佐藤隆さんが代表で(有)やさか共同農場として法人化し、味噌、牛、豚、椎茸、畑、野菜の6部門生産体制を組み、各生産施設も整備していった。農産物、加工品ともすべて「JAS有機認証」を取得、現在では社員・パートを含めて20人が働く農場になっている。

**農業でも食べていける！**

弥栄の市街地から山林を抜けてクルマを走らせていくと山沿いに三里地区が現われる。標高550mの山間高冷地で、中国山地の中でも最も早くから過疎化が進み、休耕田と廃屋が目立った地区だった。しかし今は斜面にハウスや手入れのよい畑が並び、山際には農業体験や研修、弥栄の農産物を販売する町立の交流施設もある。その手前、集落を見下ろす道路脇にやさか共同農場の事務所と住宅、

関連施設があった。

出迎えてくれたのは佐藤隆社長を支えながら事務や家事・育児をしてきた佐藤富子夫人(55)。「主人は殆ど畑や加工所の現場に出ているんです。今日は昼には戻りますから」と言い、午前中に、やさか共同農場が最も力を入れて「やさか味噌」の加工所等を見学する手配をしてくれていた。

案内してくれたのは商品企画、営業を担当する山代繁広さん(54)。広島市にある保険会社に勤務していたが47歳の時リターンしてやさか共同農場に就職、運営業務面を担っている。

「我々の育った頃の弥栄は5000人いましたが、若者の流出などで一気に2000人を切る過疎の村になりました。島根県でありながら松江市に行くのには3時間かかり、広島へ出る方が便利な地なんです。共同農場の進出は村を変えました。農業でも食べていけると言うことを農民は都市から来た若者たちに学んだのです。ここは新規就農者やイターン

者を受け入れ、農業後継者の育成にも力を入れています。一番喜んでるのは地域のお年寄りたち。楽しみながら働ける雇用の場ができたんです」と山代さんは言う。

道路をはさんで加工所が3軒並んでいる。その一つ「森の里工房」では、若い女性や数人の男性がほうれん草のパック詰め作業していた。ほうれん草は最近ではサラダとして生食する人が多く、このものは無農薬であることから特に人気があり、通年出荷している。栽培はハウスだが、極力水分を控え、冬も暖房せずに育成するのだという。

早朝に畑から収穫したほうれん草は、朝7時半から青々とした葉以外を取り除き丁寧に揃えてセロファンに入れる作業が行われ、午後一番には店頭で並ぶという。

近くに住む年輩の女性は「ここで若い人と働くのがとても楽しみでね」と語る。都市から来て夫婦で農場で働いている人、生産者の一人として働きたいと通って来る元消費者だった女性もいる。

**森の中でゆったり熟成した味噌**

隣の新築したばかりの味噌加工所では、味噌の袋詰め作業が行われていた。最新の機器が導入され、人の手にふれることなくパック詰めされる。味噌の香ばしい匂いがあふれる中で白衣をまとった女男数人が、種類別に分類したりラベルを張って箱詰めしている。

やさか共同農場が生産販売する味噌や野菜、ジュースなど





「田舎風味のやさか味噌をはじめ、合わせ味噌、黒大豆味噌、おかず味噌など種類も多く、量もいろいろ用意しますので、結構手間ひまがかかるんです」

奥の部屋では、味噌と共に20数年というペテランの三浦広幸さんが、大きな味噌樽から何種類の味噌を取り出して調べている。一口戴いたが、味噌特有の香りと旨味があり、塩っぱいという感じがしない。材料の大豆も米も麦も有機栽培、食塩も海の天然塩を使っている。

続いて山代さんが案内してくれたのが、森の中にある味噌貯蔵庫。味噌職人を自認する堀江恵裕さん（49）が23年間管理してきた。「森の冷気と風、自然環境が熟成にいいんです。蔵は平均5度で、一年半から二、三年かけて3段階で熟成し、蔵出しには3人のベテランが味噌汁で味わい、さらに社長がOKを出して決めます」

味噌は生きている、そのつばやきや語らいが聞こえると堀江さんは言う。280トンの味噌たちはナラやブナの森の工房で静かな時間を過ごしていた。

### 50歳を過ぎて、やっていける自信を得た

午後1時、佐藤隆社長（53）が事務所に見えた。35年間、先頭に立って農地を耕し施設をつくり配達も手がけて来た社長だからと、がっしりとした風貌を予想していたのだが、スマートな元インテリ青年といった面持ちだ。「僕は味噌屋。100%地元の大豆と米、麦を使ってこだわりの味噌を造っています。手前味噌ですね」と言っって名刺を出す。

いまは畜産や養豚部門は独立、（有）やさか共同農場は加工型有機農業として再スタートした。現在農産チームは、水稲5ha、野菜（路地、ハウス）3.5ha、大豆・枝豆・麦35ha、椎茸2万本を栽培しており、加工チームは味噌を年間400tを製造している。農家がつくった切り干し大根やトマトジュース等も消費者の手に届けられる。

さらに同農場が力をいれているのがネットワーク部門。消費者との各種交流会、アジアからの研修生や新規就農者・農業後継青年の受け入れ等だ。研修生は多い年には10名あり、平均2〜3名。農場に残る青年もあり、椎茸栽培や養鶏等で独立して近くで暮らしている人もいるという。

佐藤社長は、30数年たち50歳を過ぎてから、この規模ならやっていけるかなと思うようになりました。機構を分化したことでシンプルになり成功率が高くなりました。味噌は、昔から農家が田んぼの畦で大豆を育てて、家ごと味の違う味噌を造っていた。こんな田舎味噌をつくりたいと廃屋を利用して製造しはじめたのですが、今は衛生管理法等があつて、きれいな工場で宇宙服のようなものを着ないといけなくなりました」と苦笑する。

有機農業の基本は地域の資源を循環した農法で、徹底した土づくり。連作障害を防ぐために稲を2年つくったあと大豆を1年つくる、病害虫に強い品種をつくる、豊富な地下水や夏場の冷涼な気候を活用したきめ細かい栽培等。「例えば、大豆の枯れ木を田に鋤きこみ水を張ると肥えた土になり、稲や大豆は地中に深く根を張ります」と説明してくれる。



畑にて、佐藤隆社長・富子夫妻

一般には有機農業は手間ひまがかかって大変だという声を聞くが、佐藤さんは病害虫の発生をも楽しんでるように見える。もちろん安全な野菜や穀物のまわりにはさまざまな生き物がいることを消費者にも発信している。

### 農業をめざす若者たちの研修の場

クルマで畑へ向かう佐藤社長の後を追って脇道を下っていくと、斜面を活用してハウス群が並んでいる。全部で26棟の中規模ハウスで、総面積は80a。ほうれん草のあとは小松





雑木林に置かれた椎茸の原木



ハウスいっぱいに栽培されるほうれん草

菜、春菊の他、注文の生鮮野菜を栽培する。その先の畑ではトマトの植えつけと手入れを若者達が行なっている。JAから依託されたジューズ用の無農薬トマトの栽培で、8月には収穫するという。

「ここは多雨地帯の上に元田んぼだった土地。水はけをよくするため畝を高くし、そこに再生紙で作られたマルチ（土に溶けて堆肥になる）を張り、苗を植える。昨年は柵を張って苗木を上に伸ばしたが、今年は横に這わせるといふ。そう説明してくれるのは、リーダーとして働いている長男の佐藤大輔さん



再生紙で作られたマルチにトマトの苗を植えていく青年たち

(26)。両親の仕事を見て育った大輔さんは東京農大に入学して4年間学び、ついでに恋人（奥さん）を連れて帰郷した。3年たち二人の子ども生まれ、佐藤家は大きいわい、「でも、まだばあさんとは呼ばせたくないですね」と富子夫人は嬉しそうに言う。

7年前に研修生でやってきた竹岡篤志さん(29)もいまではチームリーダー。鳥取の大学では大学院で資源利用科学を学び、地域の資源を循環させる農業がしたいとここへやって来た。昨年はハウスに入り込んで葉ものを食い荒らすダンゴムシの駆除方法を開発し

「ここに残って働きます」ときっぱり言った。研修生には受入れ窓口となった町または県から年間月5万円程の研修手当が支給され、それに共同農場から給与が支払われる。時にはJAに頼まれて研修員を受け入れるなど、やさか共同農場は農業をめざす若者の貴重な研修・実習の場になっている。

若者達の作業を見守りながら、佐藤社長は「農業って楽しくてやりがいのある仕事だということ伝えてやりたいと思います。ただ、僕らの頃は、好き勝手にやって何とか食べていければいいという感じだったが、農業を趣味ではなく職業として確立し、次の世代に繋げていかなければならないと考えています。農業をとりまく環境は厳しいけれどぜひ挑戦してほしい」と語る。

暇をみて、個人の能力や体力に関係なく誰でも出来る農業のシステムづくりを制作中とのことだった。文/浅井登美子 カメラ/小林恵

た。研修中に知り合い結婚した幸江さんも、パートで働いている。

4月より研修に来た吉村昌悟さん(26)は島根大林業科を卒業、「将来有機野菜をやりたいたのでここで勉強したい」と作業を手伝っている。

3年前に研修生として来た高橋宣由さん(23)は石川県の農業大学を出ている。「ここはとても居心地がいいんですが、いずれ群馬県にある実家の農業を継ぐことになりました」山崎大輝さん(23)は松江市の農家出身、結婚して集落に溶け込むため空民家を購入し、奥さんもほうれん草の出荷作業等で働いている。

・(有) やさか共同農場  
☎0855-48-2510  
<http://fish.miracle.ne.jp/sennin-g/yasaka/>



収穫が楽しみだと言う、田植え初体験の参加者たち

市町村の合併が相次ぐ中、あえて「自立」の道を選択した福島県東白川郡鮫川村。明治22年の合併以来ずっとこの規模を維持してきた村は、昭和30年の合併にも反対し、自立の道を歩み続けた。いくつもの困難を乗り越え支えてきたのは、村民の強い絆と不屈の精神だった。そんな村が試行錯誤の末に辿りついた地域再生への道。食と農を生かした村づくり、そして都市との交流や移住者の受け入れなど、村民一丸となった活動に、応援の声も多い。



田舎は楽しい！  
地域の魅力を発信

②

# 自立の村が選んだ再生への道

## 鮫川村の農村交流活動（福島県鮫川村）

落合集落で田植え体験交流

晴れ渡った6月の空を縁取るように、森の緑が広がっている。福島県鮫川村は阿武隈山系の中腹、標高400〜700mに広がる人口4300人の村。水田と森の間に12軒程度の農家が点在するこ落合集落に、この日は賑やかな歓声が響き渡った。

この日は千葉大、神奈川大、東京農工大学の学生、他、社会人も含めた13名が、農家の指導の下、田植え体験や、首都圏の子供たちを対象にした山村留学など、熱心な交流事業を進めてきた鮫川村は、この日も集落総出の協力で、参加者たちを迎えた。

この日は千葉大、神奈川大、東京農工大学の学生、他、社会人も含めた13名が、農家の指導の下、田植え体験や、首都圏の子供たちを対象にした山村留学など、熱心な交流事業を進めてきた鮫川村は、この日も集落総出の協力で、参加者たちを迎えた。



まず苗を入れる籠が配られる



苗代へいき苗を取る作業



ハウスでは田植機用の苗を育成

導を受けながら田植え作業などを体験する。

集落で早くから有機農業に取り組んできた本郷公市さん（55）の10aの田んぼでは、「環境科学」の授業できたという神奈川大1年の石井友理さんらが泥の中で格闘中。「アマガエルとの戦いです」と笑う石井さんに「たいしたもんだ、よくやるなあ」と、農家の我妻よしさん（80）が声を掛ける。

東京板橋から参加した京條英征さん（68）は、鍼灸の専門家。今月末に鮫川村への移住が決まっている。

「NPOのふるさと回帰支援センターに、鍼灸の医者や整形外科医のいない地域を訊ねましてね、前から好きだったこの地を選んだんです」と京條さん。

移住後は村が斡旋してくれた村営住宅で、





農家の人と語る利根川先生(左)



役場からかけつけた鈴木課長



鈴木課長がガイドして竹の子掘り

鍼灸院を開業。保険が使える低価格料金で、村の人たちに利用してもらい、村の健康づくりに役立ちたいと意欲を燃やしている。

そんな京條さんの相談に乗り、移住を後押ししたのが、田植えを楽しそうに眺めていた利根川治夫先生だ。利根川先生は早稲田大、神奈川大、東京農大などで教鞭をとる傍ら、作家の立松和平氏率いる特定NPO「ふるさと回帰支援センター」で主任研究員を勤める。首都圏中心に700万人いる団塊の世代が、大量退職し始めた今、回帰支援センターでは5年程前に団塊世代5万人に、退職後のアンケートを実施。その結果40%の人が田舎暮らしを望むという回答があった。「実際に行動を起こすのはこのうちの1割くらいでしょう」と利根川先生は言うが、東京銀座の回帰支援センターの展示場には、連日問い合わせの人が訪ねてくるという。

「村なんです」と利根川先生は太鼓判を捺す。農家の手作り郷土食でもてなし

田植え作業が終わった二行は、この後本郷さん所有の山に入り、たけのこ掘りを楽しんだ。日も暮れかかった頃、集落の集会所では農家の主婦たちの集まり「ひまわり会」によって、交流会の準備が進められていた。心のもった村の「母さんの味」がテーブルに所狭しと並んだ。昼には見事な味の山菜おこわも。「どれもが嫁にきてお姑さんから習ったものばかりですよ」とメンバーの我妻芳江さん(59)はいう。

集落の主婦たちによるひまわり会は、食生活改善推進委員会も組織し、貴重な伝統食を一冊の本に記録。姑から嫁、子、孫へこの地に伝わる郷土食を伝え残していこうと頑張っている。

### 「豆で達者な村づくり」事業

鮫川村は明治22年に7つの村が合併して生れた村。以来その規模は変わらず、4年前の住民投票では、地域産業の低迷や財政面での



必要性から合併を推進した前村長の提案に、住民の7割が反対。村の自立を謳う大衆勝弘新村長が選ばれた。

「この村には住民自治の歴史の積み重ねや、共同体としての強い意識をもった村民性があるんです。金だけの問題ではないといったプライドもある」

そうした意識があったからこそ、困難な局面も乗り越え、地域再生への創意工夫が生れたのだと鮫川村役場企画調整課の鈴木治男課長はいう。

自立に向けた村づくりは交流事業を始め、



「ひまわり会」の女性たちが用意した豪華な手料理で交流会





循環型有機農業の振興、村民の健康づくりと特産品の開発を目標に、村で古くから栽培されてきた大豆とエゴマを活かそうと、「豆で達人な村づくり」をスローガンに掲げた。

役場内には「大豆特産品開発プロジェクトチーム」を発足。地域再生計画として、平成16年5月、「里山の食と農、自然を活かす地域再生計画」を内閣総理大臣に申請し、認定を受けた。

大豆は高齢者疾患を抑制する成分を含んだ優れた食材であり、さらに県が開発した新品种「ふくいびぎ」にはイソフラボンが通常の1・5倍含まれている。村はこれを農家に格安で提供し、高齢者の生きがいづくりを応援。同様に健康食品として見直されてきたエゴマ栽培にも力を入れ、商工会内にある特産品開発事業組合が本格的に商品化を始めた。

### 村の「本気」を内外へ

「豆で達人な村づくり事業」その第一歩は、研究生として村の職員を東京農大に派遣し、発酵学を学ばせることだった。

大豆の加工品開発はこうした基盤の上に、さらに東京農大の指導を受けて、風土の香り溢れるきな粉や、地元のソバと大豆を使ったソバ味噌、豆腐、豆乳などへと拡大していった。大豆に加え、健康食品として注目されてきたエゴマの栽培にも力をいれ、タレや油に加工し商品化された。

そしてこれらの加工・直売所として生まれながら、食堂も併設された「手・まめ・館」だ。オープン以来好調に売れ行きを伸ばすこの「手・まめ・館」の存在は、地元農家に大

きな希望を与え、オープン当時30戸だった参加農家も今や80戸へと増え続けている。

取材で訪ねた日も客足は絶えることなく、野菜やきのこに加え、大豆・エゴマの加工品がどんどん売れていた。丁度この日は月に何度かの「ソバの日」で、地元ソバ愛好会のお年寄りたちが大活躍。

高齢者施設のデイサービス利用者へのお弁当作りなども行うこの施設は、加工・直売の他にも地域の新たな拠点として幅広く利用され、村外からの利用者も増えてきた。年間3,000万円の売り上げを目標としたスタートだったが、一年後には5,000万円を越えるという好成績をあげている。

「手・まめ・館」の建物は老朽化した幼稚園をリニューアルしたものだ。鮫川村ではこうした廃校利用が積極的に行われている。統廃合により廃校になった村内4つの小学校を、保育所・幼稚園を一体化した「こどもセンター」として活用したり、農産物加工施設への転用も行われた。さらには高齢者介護福祉施設や村営住宅への利用が予定されている。

再び村の人たちに活用されることとなった学校は、村の再生のシンボルとして、住民たちに親しまれていくことだろう。

### 「今度住むなら鮫川村だね」

この鮫川村に10年前に移住してきたのが、高田三喜雄さん(52)・美枝子さん(52)夫妻だ。山歩きやキャンプが好きだった夫妻は、子供が独立したら田舎暮らしをと、長年の夢を、まずは埼玉県から福島県須賀川市に移り住むことで、実現させた。



「手・まめ・館」は地域の人々が楽しめるようにと後ろの森を公園に造成中



▲買物客で賑わう館内  
◀人気の豆乳・豆腐

しかし4年程でニュータウンと化してしまつたその土地には、さつさと見切りをつけ、夫妻は新たな土地を探し始めた。

昔、見知らぬ人に親切にされた鮫川村が頭に浮かんだ。「今度住むなら鮫川村だね」そういつていた村に、二人は迷わずやってきた。出版関係の仕事も辞め、「なんとかなるさ」の精神でこの村へ。

昔知合った人から「別荘でよければ」といわれ、2年程別荘住まい。仕事も紹介してもらい、村に落ち着きながら現在の土地を見つけて購入し、家を建てた。

村に移り住んで困ったことは何もない。嬉しいことなら沢山ある。目前に広がる山の緑、敷地を流れる沢水の美味しさ、自然の風、地元の人柄の良さ、野菜の美味しさ。「ムダをしなくなつたねえ」「あるものでなんとかしよう」という発想がでてきたねえ」

息のあつた二人の弾むような会話が続き、野菜畑が広がる高田さん夫妻の家を訪ねた日、家の中から聞こえてきたのは、ギターに合わせて歌う70年代の懐かしいフォークソング。高田さんはこの村で音楽好きの小瀧慎一







さん(49)と中川西宏幸さん(48)に出会ったのだ。そしてフォークバンド「案山子」が6年前に結成された。去年は16回ものコンサートをこなすほどの腕前。自宅の一室はアンプやマイクが並ぶ音楽スタジオと化した。バンドのマネージャーも務める美枝子さんは、「食と農を考える体験交流事業・NPO阿武隈NSネット」の手伝いもしながら、田舎暮らしの楽しく忙しい日々の中にいる。

### 移住希望者への、村の条件

高田さん宅から少し離れた集落に、もう一組の移住夫妻を訪ねた。鷲沢義輝さん(65)洋美さん(62)夫妻は、昨年12月八丈島から移ってきた。元々は横浜暮らしが長かった夫妻だが、義輝さんの定年後に洋美さんの実家のある八丈島へ移住した。



しかし夏場の蒸し暑さが堪えた。それならと、息子さんの一人がインターネットで田舎暮らし情報を検索。特定NPO「ふるさと回帰支援センター」にアクセスし、主任研究員の利根川先生に出会う。その利根川先生から紹介されたのが、鮫川村役場の鈴木課長だった。早速訪ねてみた鮫川村。最初に気になったのは移住を勧めてくれた息子さんだった。いずれは横浜から移り住んできたという息子さんたちに先駆けて、夫妻は移住を決めた。大きな予算はかけずに移住を実現させた。そんな希望を汲み取って、鈴木課長は鷲沢さん夫妻に「こどもセンター」保育所の送迎バス運転の仕事も紹介。「何から何までお世話いただいた」と鷲沢さんは村の誠意に胸



▲山を昇りテックで「案山子」のメンバーと練習中の高田夫妻。近所に借りている300坪の畑で野菜づくりを楽しむ。愛犬もここではストレスなし(中)  
 ▲元気のいい小松菜でしょう」と鷲沢夫妻

を熱くする。

「最初の頃は人間関係に悩みました。挨拶してもなかなか気さくに話しかけてもらえなかった」と洋美さん。

「でもね、子供たちの送迎の仕事を始めたら、顔馴染みが増えてきて、今ではすっかり村に馴染んでますよ」とご主人が笑う。

近所に借りた300坪の畑には、二人で食べるには十分過ぎるほどの野菜が、元気に育っている。雪は少ないがきりりと寒い冬、だからこそ、春の喜び。四季がくっきりとしたこの村に、いのちの豊かさを感じるという。移住して良かったと二人は今しみじみと実感している。

移住者の受け入れは村にとっての大きな事業だ。鮫川村はしかし、希望者を誰でも受け入れるという方法をとってはいない。

「村にとっての最終目標は共同体としての集落の維持なのです。山林や農地の保全管理、地域文化の継承など、集落機能を維持するためには定住人口が必要です。そうしたことを理解し、人付き合いができ、地域資源を活用するための知恵やネットワークをもっている人を優先したいと考えています」

と鈴木課長は移住希望者への条件を出す。この村が積み重ねてきた住民自治の歴史や、頼らず甘えずという自立の精神は、こんな場面でも確固とした姿勢を見せる。

集落の一員として迎えられた移住者たちは、その大きな連帯感の中に、心地よさそうに溶け込んでいる。

文/金山淑子 写真/満田美樹





左に東シナ海を見て肥薩おれんじ鉄道が走る

田舎は楽しい！  
地域の魅力を発信

# ③ 女性の目線でニセク鉄道と地域を支える

〔肥薩おれんじ鉄道〕  
（熊本県八代市他）

鉄道を利用して、人と物産の交流を

オレンジニつが向かい合う愛らしいマークを車両につけ、肥薩おれんじ鉄道のディーゼルカーが八代駅0番ホームを出発した。改札口前では、オレンジ色のジャンパーを着たNPO法人「ネット八代」の駅員2人が深々とお辞儀をしている。

肥薩おれんじ鉄道は、平成16年3月に九州新幹線が開業したことに伴いJR鹿児島本線から分離され、熊本県と鹿児島県、沿線の自治体などが出資する第三セクターの鉄道会社だ。熊本県八代駅から鹿児島県川内駅まで全長116.9キロメートルを運行している。

沿線には28の駅がある。ほとんどは無人駅だが、要となる8つの駅は鉄道会社から委託された地元のNPO法人や市民グループが運営している。なかでも八代駅を運営するNPO法人ネット八代は、肥薩おれんじ鉄道という動脈を利用して、人と物産の交流を盛んにしようと、元気が良い。八代駅前の地の利を活かして、街の活性化までも図ろうとしているのだ。

ネット八代の理事長であり、肥薩おれんじ鉄道八代駅長でもある岡田敏代さん（58）は、駅の運営の基本は女性の目線だと言つ。

「駅は街の顔。女性の目線で運営すればJRとは違った、今の時代の駅ができる」

八代駅の改札口前では、岡田さんの思いを託した沿線の産物が販売されている。芦北高校マーメイドとジャム各450円、八代名物い草ふりかけ380円、阿久根黒酢茎わかめ350円などだ。

肥薩おれんじ鉄道八代駅の窓口業務は、午前6時30分から午後6時20分まで。午前と午後を、二交代制7人で運営している。楽な仕事ではない。この日の午前小路永裕子さん（50）と養田美雪さん（45）、午後は塘永理恵子さん（52）と堀恵美子さん（40）の勤務だった。公共の仕事であるから列車をダイヤ通り運行させるのは当然のこと。キップの料金体系は複雑だ。団体や身障者などの各種割引やJRとの連係キップ。他に各種お得な割引キップの設定がある。少しの時間を見つけては、駅舎やトイレの掃除をし、観光案内も求められるのだ。



右／肥薩おれんじ鉄道のマーク、ディーゼルカー  
左／八代駅を出発するディーゼルカーにおじぎをするネット八代の職員



**NPO「ネット八代」を設立した  
八代駅長岡田さんの決意**

駅の運営を通じて八代駅前に活力を取り戻したいと奔走する岡田さんには、忘れられない光景がある。

32年間勤めた地元の製紙会社を早期退職して、念願だった自然食品の店を八代駅前の商



列車から降りてきた乗客のキップを受けとる。ホームはJR駅に通じている。



駅改札口でキップを切る岡田敏代さん



少しの時間があれば駅舎の掃除をする袁田美雪さん

店街で始めた。7年前のことだ。すでにシャッターを下ろしている店もあったが、何しろ駅前のだからと呑気に構えていた。しかし、雨の降る寒い冬の土曜日、一日中店に居ても、前を通ったのは犬2匹だけ。

「自分の思いだけで商売は成り立たない。地元の人とズに合致しないと」

そう思った岡田さんは、街の活性化に一念発起する。彼女の原点となった光景だ。

地元の仲間12人と地域おこしの勉強会を始めた。そんな時、市の企画調整課から「JRから切り離されたら、駅を民間委託する。考えてみないか」と、八代駅運営委託の話があったのだ。駅の運営は、単なる勉強会グループではやっていけない。地域づくりに責任の



八代駅前で営業する「うまか八代日替りの店」。駅前商店街の活性化に大きな役割を果たしている。二戸市から視察にきた女性たちに語る岡田さん（右）

ある団体にしなければと、NPO法人ネット八代の設立に動いた。

全国に先駆けて駅の運営を委託されたネット八代の活動から学びたいと、IGR「いわて銀河鉄道」一戸駅の運営をしているNPO法人「カシオペア連邦地域づくりサポーターズ」のメンバー2人が、岩手県二戸市から視察に訪れていた。

岡田さんが、列車に乗って沿線を案内する。「線路のすぐ山側がミカン畑。ひと昔前は甘夏ミカンが良かったのですが、今はデコポン。反対側は不知火。夕日が沈む頃は一幅の絵のようにきれいです。これが肥薩おれんじ鉄道の特徴なんですよ」

岡田さんの沿線自慢は尽きない。



たまたま隣の席に乗り合せた地元高校生にも、沿線の魅力を話す岡田敏代さん





日奈久温泉駅



日奈久温泉駅でパッケージカーに自転車ごと乗り込む観光客



日奈久温泉駅を運営する日奈久おきん女会のメンバー

### 駅舎を楽しく、役立つ場所に

八代駅から二つ目は日奈久温泉駅。この駅の運営は、「日奈久おきん女会」。60歳前後の主婦ばかり6人で運営している。

ホームを季節の花で飾り、鯉のぼりが泳ぐ。日奈久温泉ゆかりの俳人種田山頭火の実物大人形が展示してある。近所の主婦が普段着で働いている親しみある駅だ。視察の法人理事阿部秀子さん(50)は、感激の様子。



野田郷駅はNPO法人「野田郷」が運営。左は駅長の野添重年さん(72)、元JR職員

「ただキップを売るだけでなく、目で楽しめる駅になっていた。主婦が、地域の知恵を活かしてやっていて、地元もそれを受け入れているのを感じる」

日奈久温泉駅を出て不知火海岸を55分間走ると水俣駅である。運営するのはNPO法人水俣教育旅行プランニング。駅舎の中にパン屋と結婚相談所、列車を待つ客がちょっと読書できるミニ図書館も備えるユニークな駅になっている。

駅を運営するNPO法人は、それぞれに特徴を持ち、独自の活動をしている。

「肥薩おれんじ鉄道の沿線はNPOが支えているという特徴を出したいんですよ」

岡田さんたちは、その特徴を形にするため、開業3周年を迎えた今春、記念の「肥薩おれんじ鉄道まち歩きマップ」を発行した。

### 鉄道を存続するための魅力づくりを

そんな努力をしても、肥薩おれんじ鉄道は年3%ずつ乗客減だ。昨年度の決算は1億7800万円の赤字が見込まれている。

「鉄道が経営不振になると廃線になる。毎日危機感を持ってやっています。ネット八代が起爆剤になって、沿線で駅を運営するNPOが誕生している。仕掛け人が居ないと街は変わらないから、今は仕掛け人で」

岡田さんは危機感をバネに3年間の全てを、八代駅と駅前の活性化、それに沿線のネットワーク作りに打ち込んだ。

「1年前と比べると、今は周りに人がいっぱい居て、回り始めたなと思います」

何とかして肥薩おれんじ鉄道をにぎやかにしたいと願う岡田さんのエネルギーは、留まるところを知らない。

「鉄道を存続させるためには、地域に魅力がないと人は来てくれない。まずは、どうやって自分が楽しくなるかを考えているんですよ」

八代市役所生活安全課の植田浩之主任は、NPO法人が駅の運営で頑張っていることが市民の刺激になっていると評価する。

「最初の一年は、相談にも来られていました。今では自分で運営力を確立され市民交流の拠点となっています」

何ごとも自らの事と捉えて活動するNPO法人ネット八代を知れば知るほど、最も得をしたのは沿線の自治体と駅の運営を委託した鉄道会社なのだと思えてきた。

文・写真/芥川 仁





自然環境を保全して  
地域の活性化——1



上/田んぼの放鳥したコウノトリ  
下/コウノトリの郷公園のコウノトリ

## 人とコウノトリが共生する 豊かな地域づくり

【小さな世界都市・豊岡】の挑戦 とよおかし  
兵庫県豊岡市

43年ぶりに自然ふ化したコウノトリのヒナは順調に育ち、7月末に大空へ羽ばたいていく。コウノトリが日本の空から消えて30数年、最後の生息地だった豊岡市では、兵庫県立コウノトリの郷公園の専門スタッフ、農家、市民、行政が、コウノトリの野性復帰をめざす活動と環境づくりに取り組んできた。

一昨年自然放鳥したコウノトリが田んぼで餌をついばむ姿は人々に感動を与えているが、自立には大量の餌やねぐらの確保など課題も多い。人もコウノトリも棲める豊かな文化、地域、環境づくりをめざして、豊岡の挑戦は続く。

### コウノトリ共生部が主体になって

いまでは古いが貴重な市役所本庁舎を抜けた裏手の建物にコウノトリ共生部がある。部には、コウノトリ共生課と農林水産課、農業共済課の3課がある。環境政策の企画立案から自然再生、農林水産業の振興、コウノトリ野生復帰のPRまで幅広い取り組みをしており、豊岡市の「コウノトリと共に生きる」という姿勢が伝わってくる。多くの観光客が訪れるコウノトリ文化館はコウノトリ共生課の一部であり、現場の視点で仕事をしている。我々の依頼に真摯に対応してくれたのがコウノトリ共生課の友田実那さん(22)だった。

私の顔を見ると、長靴を3足かかえて階段を下りてきて、我々をコウノトリの取り組みの中へ案内してくれた。

念願のコウノトリ共生課に今年から配属されて、とても充実していま





コウノトリ文化館（上）と沼や水田のある郷公園で生息するコウノトリ

す」と言う。父親について小さい時から野山を歩き、野鳥や昆虫と親しんできた。

豊岡市は平成17年4月に豊岡盆地の近隣1市5町が合併して新豊岡市としてスタートしたが、その年の9月、半世紀にわたって保護・人工飼育してきたコウノトリ5羽を初めて試験的に放鳥した。

保護の最後の手段として、昭和40年に人工飼育のためコウノトリを捕獲したとき、「きつと大空へ帰す」と約束した豊岡の人々の想いは受け継がれ、いまようやく約束を果たそうとしている。難しいといわれる野生生物と人間との共生、そのモデル地区になれるか、「小さな世界都市・豊岡」に各国関係者も注目している。

### 「コウノトリとは1000年にわたる歴史があった

豊岡盆地の真ん中に位置し、県北の政治、文化、経済の中心都市である豊岡市には、中

た。

江戸時代には全国各地に生息していたというコウノトリだが、その受難の歴史は既に明治時代から始まっている。豊岡市がまとめた資料によると、コウノトリ等野生生物の受難は明治期の近代化と共に始まり、第2次世界大戦後は開発等の影響もあり、さらに加速して絶滅へと向かった。

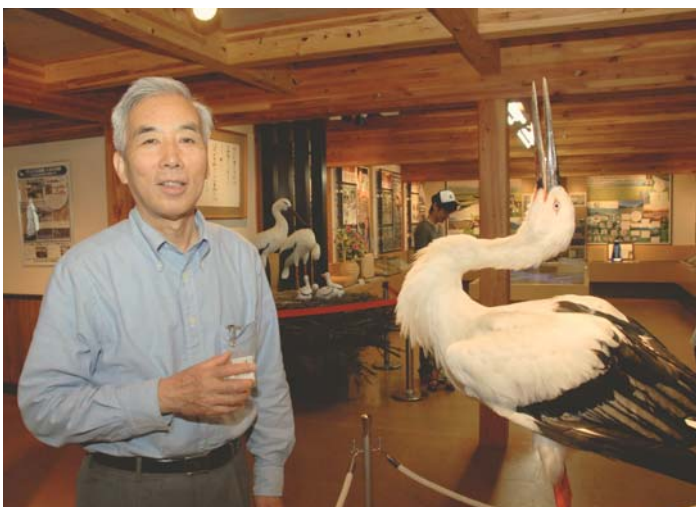
各地に飛来していたコウノトリもいつしか豊岡盆地だけが生息地となった。豊岡では戦後間もないころから官民一体で、熱心な保護活動に取り組み、昭和40年、野生コウノトリが12羽まで減ったとき、2羽を捕獲して人工ふ化に踏み切った。当時のコウノトリの飼育場は、現在はコウノトリ保護増殖センターに改称されて、兵庫県立コウノトリの郷公園の付属飼育施設となっている。市内祥雲寺地区にある兵庫県立コウノトリの郷公園の野生化・繁殖ゾーンには、繁殖ケージと馴化ケージがあり野生復帰の訓練が行われている。

（ともに非公開）。現在は両方の施設で100羽以上のコウノトリが飼育されている。

市ではこの郷公園内に平成12年、豊岡の文化や目指すべき方向などを展示する「コウノトリ文化館」を建設し、普及啓発している。水辺で暮らすコウノトリたちの姿も間近で観察でき、昨年度は48万人が訪れる名所になった。落ち着いた雰囲気を保ち、コウノトリたちは悠然と餌とりや水遊びを楽しんでいる。入り口付近の水田にある人工巣塔には、数羽の放鳥コウノトリが居つき見学者を喜ばせている。

文化館館長の松島興治郎さんはコウノトリの飼育に長く携わったコウノトリの生字引と言われる人だ。生態や歴史に詳しく、いち早く保護・増殖を訴え、コウノトリと寝食をともにしてきた人だった。

「家は農家、私の子供の頃は、まだコウノトリがいた。戦時中は周辺の大木がみな伐採されて、鳥たちは巣を失い、戦後は開発やほ場整備でジル田（湿田）が消え、農業は機械化し、農薬をい出したため、あつという間にコウノトリは数が減っていきました。昭和30年にはコウノトリ保護協賛会（後に但馬コウノトリ保存会）が結成されて私も保護活動に当たりました。餌とな



コウノトリ保護活動の第一人者、松島館長



るドジョウを各地から持ち寄るドジョウ一匹運動や、コウノトリをそつと見守る運動等が行われましたが、35年以降はヒナも生まれなくなり、最後の手段としてペアを捕獲、人工飼育に踏み切りました。毎日付きつきりで世話をしました。が繁殖に至らず、46年には市内にいた野生の1羽も死亡してしまいました。私は1日として休めない、自分がやらなければという思いでした。皆素人、でも鳥が教えしてくれる、コウノトリも頑張っているから私も頑張るという感じでした。しかし環境の変化というものは凄く、工場からの有害排水、農薬、家庭からの雑排水で河川は汚れ、魚も棲めないほどでした」

資料の中に青年松島さんが人工飼育のために1羽を捕獲して抱いている写真がある。その目は真剣で悲しげだ。

昭和60年、コウノトリの幼鳥6羽がロシアから寄贈されるとき、松島館長は新潟まで迎えに行った。寄贈されたコウノトリがペアと

なり、初めてのヒナが誕生し人工飼育は軌道に乗った。「もともと渡り鳥であるコウノトリに国境はない」と松島さん。

### 湿地を鳥たちの楽園に

コウノトリ共生課の友田さんの案内で、新たに予定されているコウノトリのエサ場としての湿地「ハチゴロウの戸島湿地」を訪ねた。円山川が日本海に注ぐ下流域、対岸に城崎温泉のある地区で、総面積は3・8ha。汽水域とつながる川があり、魚類が多く侵入してくる湿地には葦が茂っていた。この地を「コウノトリのエサ場としての湿地」へ整備するという案を、地域や地権者が理解・協力してくれることになり、市が購入して平成20年度中を完成予定として整備することになった。

湿地名称の「ハチゴロウ」は平成14年8月5日に豊岡へ飛来してきた野生コウノトリの愛称。ここで毎日のように採餌するようになり、人々はハチゴロウと呼んで見守った。野

生復帰をめざす市民に希望を与えてくれたが、今年2月に死亡しているのが確認された。

長靴を履いて湿地へ入っていくと、海水が流れ込む小さな川があった。小魚の姿があり、川の先の湿地内にはフナやボラ、ナマズなどが大量に生息している。整備後にはミスアオイの花も美しく咲く。

湿地と続く奥まった山際には、昔農家が植えたのか、柿、梅、栗、ぐみなどの果樹が植わっている。その奥の里山にはシカやイノシシ、クマも住んでいる。人間の腹部からは清水が湧き出し湿地に流れ込んでいる。「この湧き水は、末期の水」といわれ、死ぬ間際に飲みたいといわれてきたほど、大切な真水なのだとききました」と友田さんは言う。

「整備では現状の地形も生かしつつ、コウノトリがエサを採りやすい湿地として、水深15cmを基本に整備します。コウノトリはエサを採るのが下手な鳥なので、浅い水辺に生きものがうじゃうじゃいるような場所が必要なんです。しかも飼育下では一日に500g、ドジョウで言えば80匹もの量を食べてしまう大食漢！ そんなコウノトリが生きていける自然の力を再生できればと思います」

コウノトリが野生で元気に生きていくことの大変さも垣間見た思いであった。

### 生きものとおいしく安全なお米を育て

コウノトリの自然放鳥に際して、懸念されたのが水田の低農薬・無農薬化と、エサとなる生きものが生息できる環境づくりだった。現在豊岡で行われている「コウノトリ育て



ハチゴロウの戸島湿原を案内してくれる友田さん(上)と湿原





「農法」は、おいしいお米と生きものを同時に育むことをめざし、約155ha(7月現在)の水田で実施されている農法だ。コウノトリが安心してエサをついばむ風景を農業者も市民も共有しているという思いも込められている。平成15年から事業によりピオトップ・冬期湛水の水田管理を委託、無農薬・減農薬による水田づくり学習会が開催され、専門家による田んぼの生きもの調査も定期的に始まった。

調査結果によると、無農薬で冬期湛水している田んぼは圧倒的に生きもの数が多い。しかも米の生産量はそれほど落ちなかった。コウノトリの郷公園入り口で、地元にごだわった商品を販売する「コウノトリ本舗」では「コウノトリ育む農法」で作られたお米が販売されている。このお米は通信販売も行われており、徐々に販路を増やしているとのこと。これらを生産している農家の方々がコウノトリ本舗に集まってくれた。

峠勉さんが経営する(有)朝日農事は、35haの水田を管理している。「担い手のいなくなった農家から水田の管理を頼まれるようになり、農業法人を組織して稲作専門で営農するようになりました。男性2人が従事し、効率も良くなっています。農薬ゼロというわけにはいきませんが、虫が死なない程度の低農薬で作っています。野生コウノトリのハチゴロウもうちの田んぼによく来ていましたよ」

瞬悦喜さんは、コウノトリの郷公園がある祥雲寺地区でコウノトリの郷営農組合の組合長をしている。

「私は1.5haの田んぼで稲作をやっています。祥雲寺地区は田んぼを持っている人が大勢いますが、よう作らんわいという人も増えてきて、8人で作業しています。昔は、コウノトリが田んぼに来ると、稲を踏んづけてしまつので、害鳥だと言ったときもありましたが、無農薬・無化学肥料で農薬を行い、コウノトリと共に生きていこうと決めました。苦労も多いのですが、コウノトリのためにも頑張っています」

根岸謙次さんは若手を代表する専業農家で、豊岡エコファーマーズの一員だ。70代の人も含めて、5人のメンバーで農薬に取り組んでいて、一人当たり約10haの田畑を耕作している。

「コウノトリ育む農法に取り組み、安全でおいしく付加価値のある農産物を作りたいと思います。冬の田んぼに水を張っておくと、イトミミズや微生物が繁殖して、トロトロ状の土壌になります。そこには、稲がしっかりと根を張ることができるので病害虫に強い、丈夫な苗ができるんですよ」

根岸さんは、田んぼに住む生きもの調査も行い、無農薬というだけでなく、生きものがたくさん住める田んぼ作りの模索にも熱心だ。

農家の方々のコウノトリに対する暖かいまなざしと熱い思いが伝わってきた。

### 子どもたちが生きものとのふれあいを

豊岡ではコウノトリ保護の取り組みや、野生復帰を機に、いろいろな市民グループが環境学習やコウノトリ追跡調査など、コウノト

りと共に生きるまちづくりを進める一員として活動を行っている。

子どもたちが参加して自然や田んぼや地域の生きものを調査する

「田んぼの学校」を開催しているのは、NPO法人コウノトリ市民研究所。コウノトリ市民研究所の主任研究員でもある友田さんの案内で代表理事の上田尚志さんと理事の鳴海清幸さんをコウノトリ文化館に隣接する事務所へ訪ねた。

上田さんは高校の生物の先生。友田さんは高校生のころ生物部で上田さんに学び、コウノトリを含めた豊岡の自然を、より魅力的に感じるようになったと言う。

農家などの協力で水を張った水田にピオトップを作り、その中で子どもたち一人一人が研究員として水辺の生きものを調査している



右/ヒナが育つ人工巣塔。飼育係が定期的に観察、この日はテレビ局の人も同乗  
左/「コウノトリの郷米」を手に、左から瞬、峠、根岸の農家の皆さん







コウノトリ市民研究所の鳴海、友田、上田さん（上）と研究所が制作した動植物図鑑

広報から湿地整備までいろいろな仕事があ

「子どもたちが自然や生きものに関心を持つことが少しでもコウノトリ野生復帰の支援になれば。私たち自身も大人の生物部のような気持ちで楽しく活動しています」と優しい目で話す上田さんが印象的だった。

という。6年前の平成13年より開催し、毎月第2日曜日、誰でも自由に参加できる。「初めて田んぼの学校を実施したときは250人の親子の参加があり、とても驚きました。今でも毎回、80〜100人が参加して自然を楽しんでいます。真冬や大雨のときでも、子どもが行きたいというので“と親御さんがついてこられ、とても楽しみにしてもらっているんだなあと感じています。活動を行っているピオトープにもいろいろあって、長年水を張っている田、一部を深く掘った田、陸地を設けた田など生息する生きものの種類や数が異なりおもしろいんですよ。子どもたちの好奇心や熱意はすごい。今ではバケツを渡せば水路や田んぼへ走っていく、頼りになる調査員です。調査後は生きものをみんなで田んぼに戻します」と上田さん。

「田んぼで調査した後は、大鍋を囲んであったかい汁を食べるんです。僕が作るんですよ。イノシシやシカの肉をいれて子どもたちも父さんお母さんもみんなでわいわい、楽しいんです。これも田んぼの学校の名物ですよ」と笑顔で話すのはコウノトリ市民研究所理事の鳴海さん。材料集めから調理まで、子ども

たちの胃袋担当だ。

コウノトリ市民研究所では、これらの調査・観察結果をもとに、豊岡盆地の貴重な生物、植物、鳥類のカラーパンフレットを製作、コウノトリ本舗などで販売している。豊岡盆地の多様な生きものや、絶滅が危惧されている植物などを知ってもらい、保護・育成していきたいという思いとともに、コウノトリ市民研究所の運営資金として一役かっている。

上田さんは切り紙の研究家でもあり、生き生きとしたカプトムシやトンボ、コウノトリなど子どもが楽しめるペーパークラフトを作成している。このペーパークラフトは素人でも簡単に作れ、1セット200円で販売されている。

り、とても大変だけれど楽しい」という友田さんはコウノトリが運んでくれたような爽やかで心和ませてくれる存在。コウノトリとの共生は、必ず進展していくに違いない。

カメラ/小林恵



▲田んぼの学校の様子  
(コウノトリ市民研究所提供)  
▶上田さん考案の動物たちの切り紙作品



・豊岡市コウノトリ共生部 ☎0796-23-1111代  
・豊岡市立コウノトリ文化館 ☎0796-23-7750  
<http://www3.city/toyooka.jp/kounotori/index.htm>



自然環境を保全して  
地域の活性化  
2



休耕田に菜の花を植えて菜種油を搾油し、使用済の廃食油を回収してバイオディーゼルの活用する大朝地区の「菜の花プロジェクト」。昔ながらの自然環境と農業の再生で美しい里山を取り戻したいという一人の住民の熱意が、多くの住民の共感を得ながら運動の輪を広げてきた。菜種油の廃食油を使ったスクールバスは、いい匂いを立てながら町内を走っている。

# 菜の花から資源循環型社会を

いーね！ おおあさ  
「INEOASA」の菜の花プロジェクト（広島県北広島町大朝）

## 小学生の環境学習の場に

北広島町は、平成17年に大朝、千代田、豊平、芸北の4町が合併して誕生した。北部に位置する旧大朝町は島根県に接し、四方を700～1000m級の山に囲まれた高原の町。中世には日本海と瀬戸内を結ぶ主要道となり、山沿いには7つの城跡・寺跡が残っており、市街地の旅籠や古民家には、かつて街道として賑わった頃の面影を偲ぶことができる。

5月中旬、地域を黄色に染める菜の花の最盛期は終り、田植えの終わった水田は青空を映して美しい。しかし大朝小学校の近くにある畑にはまだ少し菜の花が咲いていて、花を終えたものはしっかりと実をつけている。学校帰りの小学生に菜の花畑に集まってもらった。

大朝ではNPO法人「INEOASA」の呼びかけに学校も環境学習の一環として賛同、昨年からは3～6年生が「菜の花プロジェクト」の体験学習を行っている。3、4年生は菜種の種蒔きと苗の移植（9月下旬）、菜種の刈取り・こなし作業、菜種搾油体験（6～7月）、5年生は田植え、田んぼの草取り（5月、7月）、稲刈りと脱穀（9～10月）、そして6年生になると年間活動として廃食油

の回収を手伝う他、バイオディーゼル燃料（BDF）精製工場の見学と精製体験、有機栽培した「ぴゅあ菜米」の販売等を体験する。背丈程もある菜の花を見ながら「昨年小さな種を蒔いたらすっかりと芽を出した。それが大きくなって花を咲かせているなんて感激です」と女の子が言う。黄色い花には蜂が飛んできて蜜を吸い、花を終えた菜は葉をアブラムシに食べられながらも沢山の実をつけている、そんな観察も子供達には新鮮なよつで、保田哲博理事長がいろいろ説明している。この場所は、元広島県高冷地試験場だった土地を町が購入したもので、市民の農業体験活動

の回収を手伝う他、バイオディーゼル燃料（BDF）精製工場の見学と精製体験、有機栽培した「ぴゅあ菜米」の販売等を体験する。背丈程もある菜の花を見ながら「昨年小さな種を蒔いたらすっかりと芽を出した。それが大きくなって花を咲かせているなんて感激です」と女の子が言う。黄色い花には蜂が飛んできて蜜を吸い、花を終えた菜は葉をアブラムシに食べられながらも沢山の実をつけている、そんな観察も子供達には新鮮なよつで、保田哲博理事長がいろいろ説明している。この場所は、元広島県高冷地試験場だった土地を町が購入したもので、市民の農業体験活動

上／菜の花畑で大朝小学校の子供たち  
左上／収穫を終えた菜の花を鋤き込んだ保田さんの水田。右側は豊製造工場  
左下／市街地で保田さん。民家の隣が大朝交通





の場に提供している。

保田理事長の水田は一足早く菜種の収穫を終え、菜の根や茎は田に鋤きこんで水を張っている。「とてもいい緑肥になるので、農薬も化学肥料も無しでおいしい米が採れるんです。トラクターに使う燃料もバイオ燃料だから、資源循環型農業の見本です」と言っていて、トラクターでひと回り。数日中に田植えを予定している。

### 豊から出るゴミ問題が

### 「菜の花プロジェクト」へ

保田哲博さん(69)は豊製造と内装業を営んでいる。「豊と内装のクズから毎日出てるゴミの山、業者にゴミの処理が課せられる中で、リサイクルとは？循環型社会とは？という思いの中から、リサイクル産業や環境問題を勉強しなくちゃあと思いつき、それらをテーマにした講演会や集会があると全国各



堀田高広さん(左)と保田哲博さん

地へ出かけていったんです」

そんな平成12年の夏、滋賀県愛東町(現東近江市)で天ぷら油で走るクルマと出会って衝撃を受け、滋賀県環境生活組合藤井絢子理事長を訪ねた。そこで生まれたのが「休耕地をすべて菜の花畑に、菜の花油田にしよう」という菜の花プロジェクト構想。

しかし菜種油を取り、廃食油からBDF燃料をつくると言っても誰も理解してくれない。そのため保田さんはメーカーから機器をレンタルしてきて、町の収穫祭のときデモンストレーションした。家庭から集めた廃食油が精製され、それで自動車やトラクターが動く様子を見た町民から、菜の花の町にしようという気運が生まれてきた。

13年1月には会員24名で「INEOASA」が設立され(11月にNPO法人として認証)、2月には藤井絢子氏を招いて「環境と健康にやさしい町づくり」の講演会。反響は大きかった。それを機にBDF精製プラントを購入するための資金集め「菜の花応援団」を開始、資金も少しずつ集まるようになった(応援団になると一人1口3000円を出資)。

菜の花畑のモデルとなった保田さんの田んぼには、小学生たちも足しげく見学にくるようになり、集落単位で廃食油の回収もはじまる。

その年「菜の花応援団」に寄せられた基金は227名・736口、223万円を越えた。精製器機を購入、JAの倉庫を借りて「てんぷら油再生燃料精製棟」という看板を立て、13年4月には稼働を開始した。半年後スクーパバスの燃料に使用されるようになった。島



根県浜田市弥栄の「やさか共同農場」(本誌取材、4〜7頁参照)のように、精製したものを持ち帰り自社のトラクターに使用するケースもあった。

### 保田さんの夢を支える実務者たち

保田さんの夢やプランを支援し、実務や広報活動を担ってきたのが「INEOASA」の理事で、(有)大朝交通の専務取締役の堀田

花を終えて実をつけた菜の花と菜種。搾った無農薬の菜種は「わたねあぶら」、お米は「大朝米」として販売されている(上) BDF利用で走るホープバス(右)







▲専用のポリバケツで回収される  
廃食油。小学校・給食センターで  
▶集めた油を精製する機器の前で  
堀田さん  
▼大朝バスターミナルを出発する  
BDF使用のスクールバスと町内  
循環バス



高広さん(42)。「INE OASA」の事務局も大朝交通の中に置かれ、連絡事務は女子社員が担ってくれている。

保田さんの夢が早々に実現し、スクールバスにBDFが用いられたのも、堀田さんら交通社の協力があつてこそと思われる。現在大朝と千代田等を結ぶ巡回バスにもBDF燃料を取り入れるなど、NPO活動を支える重要な存在になっている。

同社は鉄道のない大朝地区や北広島町の住民の足として、バスやタクシーをきめ細かく運行してきたが、最近では堀田さんのアイデアで、高齢者が病院や商店、知人の家などへ気軽にに行けるようにと、一回500円で「玄関先から玄関先まで」送迎する乗り合いの「ホーバタクシー」を町と共同で運行している。堀田高広さんは、大阪へフランス料理の修

業に出ているが、長男であることから帰郷した。「INE OASA」の仕事では、パソコンを駆使して文書をまとめたりホームページを作成する等の広報活動を担っている。

BDF油を利用したホーバスの使用について、堀田さんは「BDFは月平均300リットル消費していますが、エコロジーバスとして運行するにはもっと廃食油の回収が必要です。学校給食、個人、レストラン等が回収先です。千代田地区等でも回収をはじめましたが、今後は回収先を北広島町全域に広げたい。そのためには無報酬のボランティアに頼るのではなく、システム化することで有給にしていく必要があります」と語る。

レストラン等ではラードを混ぜて調理する場合が多いため、BDFとして使用できないという。

現在のところ、保田理事長らは私財も投じて運営をしている。それについて保田さんは、「私の一家は戦時中に大阪から疎開してきて、戦後の食糧難の時も地区住民に助けられて暮らせた。そこから郷土愛が生まれたのです」と言う。

15年4月は「全国菜の花サミット」が大朝で開催された。菜の花緑肥を使うコシヒカリ米の生産も徐々に広がり、「おおあさびゅうあ菜米」として市販されるようになった。5kg 3310円と、一般米よりやや高いが、安全で美味しいと人気があり、通販サイトも開始している。また、国産の添加物ゼロの菜種油は、昔ながらの手搾り方法で製油する出雲市の製油所に依頼しており、菜種本来の風味がある上に、オリブ油を超える透明度のある黄色が見事だ。今後は「びゅうあ菜」のブランド開発がさらに高まっていくだろう。

文/浅井登美子 写真/小林恵



廃校を改装した宿泊施設・田原温泉と近くの森に自生する天狗ソデ群生(国天然記念物)

・「INE OASA」(い〜ねおおあさ) ☎0826-82-3950  
URL <http://www.e-ijan.jp>





◀コクヨ製の森(下) ▲四万十川の右岸に広がる「結の森」



# 企業と提携して森林の整備と木材の活用

## 大正町森林組合＆コクヨの「結の森」

(高知県四万十町大正)

四万十川上流域の森林を管理する大正町森林組合と、紙製品・事務機・家具を生産販売するコクヨは、9年前から集成材工場で間伐材家具を生産する取り組みを行ってきた。山村と都市を結び、資源循環で活性化を図っていくことが企業の社会的役割であると考えてきたコクヨと、集成材で人工林の経済価値を高め、森林を再生したいという森林組合の思いが一致し、昨年10月「コクヨ—四万十・結の森プロジェクト」が発足した。美しく豊かな四万十の森と川を未来へ繋いでいくための事業が始まっている。

### 「高幡ひのき」の名産地

旧大正町は、四万十川の上流から中流あたり、四万十川最大の支流、橋原川が合流する田野々地区を中心に、四万十川川岸や幾つかの支流の谷間に集落が点在する人口約3400人のまち。川は蛇行しながら滔々と流れ、川に沿って国道とJR予土線が走り、周辺には急峻な山々が連なっている。

大正地区の面積の93%は山林で、四万十檜と呼ばれる良質のヒ

ノキの森になっていく。このヒノキは「高幡檜」ともいわれるブランド品で、独特の薄紅色で香りが高いことで知られる。

森林組合事務所は元大正町の中心部にあり、一昨年集成材で新築した瀟洒な木造の建物である。壁も床もデスクもすべて集成材で作られた、いわば集成材のモデルハウスで、木の持ち味や節も生かした材は、気取らない普段着のような温もりがあり、明るくて香りがよい。

職員のほとんどが山や別の部署で働いているため事務所は静かだが、大正町森林組合で働いている人は、森林作業員33名(「緑の雇用」含む月給制社員15名、請負制による作業員や見習生18名)、集成材工場25名、木材市場7名で、請負い会社社員や臨時職員を入れると70名の大所帯である。

森林組合とコクヨが提携して新たな森林事業を推進するシンボルの森「結の森」は、クルマで10分ほど走った四万十川沿いの「道の駅・四万十大正」の対岸にある。ヒノキを主体にした110haの森で、比較的良好に手入れされ、優良ヒノキの多い森林だが、コクヨと



地域の森の木や集成材を使って建設した施設。上は大正中学校体育館、下はキノキ集成材による「樽ハウス」(道の駅前広場)







大正町森林組合事務所。壁・床からオフィスデスクまで集成材を使用

の提携を受けて、さらに整備と保全作業が行われている。森の中で作業道づくりが行われているとのことで、森林整備部長の田村耕一さんが現地へ案内してくれた。

### 作業道開設は「四万十方式」で

「結の森」は、外見ではなだらかな森に見えるが、いきなり勾配のきつい道が山頂へ向かって開設されている。切り出したヒノキを積んだフォワードが下りてきた。急峻な道は出来たてのホヤホヤということだが、しっかりと踏み固められていて歩きやすい。盛土面は、表土を順番に載せ、間材した木の切り株等も利用しているので、道が崩れることがなく、下草もまた生えてきて山肌は緑に再生されるという。

「この方法は四万十方式といい、旧大正町の方が開発したもののなんです。間伐したヒノキを運び出すためには道路が欠かせない、森林に最もやさしく、安全で再生可能な開墾方法で、見学者もよく訪れます」と田村さんが説明してくれる。

10分ほど登っていくと二人の男性が作業道開設の作業をしていた。ミニバックフォアに乗り、バケットの先を自分の手足のように上手に使う作業しているのはベテラン津野修三さん(54)。まず表面の黒土部分を新設する道路に積み上げて広げ、間伐した木の切り株を掘り出し道の脇に並べて圧縮し、赤土を敷いてキャタピラーで踏みならすと、たちまち立派な作業道が完成する。その先では、林道開設計画に併せて林眞次さんがヒノキを間伐している。やがて、切り出した材木を幹線道路脇に降ろした山中敏博さん(27)が戻ってきた。四万十町に家があり1年半前に転職してきた。

「山の作業はいまではすべて機械化されていますが、そのためには全部で12の特殊免許が必要です。山中君は幾つもの資格も取り、山仕事にとっても熱心。うちの期待の星です」と田村さんは言う。

### 自分らが植樹したヒノキが、いま切り出しを迎えた

別の森へ案内してくれた。4人の請負社員の人がヒノキの切り出し作業をしている。堀川孝夫さん(61)は山で40年間働いてきた大ベテランで、切った斜面に置かれていた木を機械で持ち上げて空地に運び出している。人手を使わず、ロープが木幹に巻き付きついて持ち上げるといふバックフォアだ。運び出した木は枝打ちして長さや太さに併せて束ね、運搬車に乗せられ里へ降ろし、小枝や小木は山に返して森の肥やしになる。

田村さんが購入してきた清涼飲料水を飲み

ながらひと休憩。「若い頃に自分が植えた木をいま切り出している。よく育ったもんです。大切に役立たせてやりたいね」と堀川さん。ブルーのシャツ姿の森春水さん(60)は「森と共に生きてきました、名前からして森の詩人のようでしょうが」とおどける。ベテランたちの指導の元で山師をめざす本山泰稚さん(25)は3年目。「先輩たちが大切に植林して管理してきたヒノキです。一本だって無駄にできないという思いで働いています」と言う。

「結の森」で働いていた人たちもそうだが、山の作業はこの道のプロである請負社員に委託する場合が多い。「請負の方が効率がよくて、働けばそれに見合った収入になる。でも国産材は相変わらず安いね」と堀川さんは言う。

支払い額は木材の価格を基本に計算する。その業務を行っているのが田村さんだ。

「請負い金額で揉めることはありません。皆そのへんのことを分かってくれていて信頼関係がしっかりできていますから。私が30年前



森林作業をする人たち。左より、切り出した木を整えて運搬する堀川さん、山から材木を運び出す山中さん、「結の森」で作業道開設作業をする津野さん





上/大阪より来町したコクヨ本社CRS部のみなさん。左より中森さん、齊藤さん、横田さん。下/県職員、地域の各代表者らが参加して開催した運営協議会

森の保全活動を支援・助成していくという社の方針で、各地を見てまわりましたが、どこも今ひとつピンとこない中で、間伐材も100%活用してビジネスに生かす大正町森林

の要を担っている。森の保全活動を支援・助成していくという社の方針で、各地を見てまわりましたが、どこも今ひとつピンとこない中で、間伐材も100%活用してビジネスに生かす大正町森林

に森林組合に入社した頃は100人の職員がいて、まだ森に夢を托して植林をしていました。いま切り出すヒノキは樹齢35年以上のもので、我々や先輩たちが植えたものです」と田村さんも感慨深げだ。

この森では、木を2.5m間隔で、一列を間伐して2列を残すという「虎刈り」方法で保全していくと言う。それにより日当たりもよくなつてヒノキの生育がよくなり、空地も出来るので作業がしやすくなる。ミスナラ、ケヤキ等の広葉樹も保全育成樹になっている。

森を出て「材木市場」へ案内してもらった。広大な広場にヒノキの丸太がうす高く並んでいる。太くて長い木は建材として売られるが、端材や曲つたもの、死節のあるものは集成材工場へ。しかし樹齢70〜80年の立派なヒノキの丸太、それが8000円から1万円と聞いて言葉を失った。輸入制限も出て高騰している外材を相変わらず買い求め、国産材を使う努力をしない日本企業の経済性と効率優先の姿勢。「ひどい国だね」と木に触れる。いい香りが手のひらに染みだ。

## 日本の森を育てる コクヨの社会的貢献活動

コクヨ(株)(本社/大阪市)は明治38年創業の事務機、紙製品、オフィス家具等を製造販売するトップメーカーで、平成17年に100周年を迎えた。沢山の紙製品や家具を生産するために、森林資源に大きく依存している。新たな100年へ向けて、日本の森を育てる、山村と都市を結び、資源循環で活性を図ることが企業の社会的責任であると模索してきた。

大正町森林組合とは間伐材利用を進める集成材工場(竹内将純工場長)を10年間一緒にやってきたことから着目してきた。森林を保全し、商材などの開発などによって経済活動を高め地域を活性化していくための「結の森プロジェクト」計画が策定され、両者が協力してさまざまな事業を実施していく契約が昨年4月に交わされた。

運営協議会(コクヨと森林組合、それに地域の各種団体責任者、関係係者らが参加)開催のために来町しているCRS環境

マネジメントグループリーダーの齊藤申一さんに話を聞いた。齊藤さんは毎月町を訪ね、FSC森林認定の申請を行うなど、プロジェクト推進の要を担っている。

「コクヨ栗の森」は、民家に近い道路脇の斜面に設けた栗林で、コクヨ社員の体験交流の場としての活用を期待している。既に10年前に植樹した栗が30本あり、今年実をつけそうだと期待されている。今年と来年で10

ちなみにコクヨからの助成金は10年間で4000万円。コクヨは町内に住宅を一軒借りて、折があれば町の行事にも参加する。今回は中森功さん、新入社員の横田梢さんも参加し、プロジェクトを手伝っていく。集成材工場や結の森、地元の名産品である栗の植林場所を見学した中森さんらは「感動しました。これからは社員も来て、木や土にふれる機会をつくりたい」と語っていた。

組合の考え方に感動しました。このヒノキの森は長年管理されてきたので良質の材を産出していますが、日本ではまだ木材の活用が少ない。間伐材も集成材にすれば魅力ある優良木材になるので、それを我々がPRも兼ねて手伝えたい。竹内工場長が考案したテープルは『通販生活』で販売され、今もロングセラーを続けています。工場長にはもっと金を出せなんて言われませんが(笑)、一企業が出せる助成金には限度があります。10年後を目標に、人的なつながりをもっと強固にしたいと思っています」



切り出した四万七ヒノキが集積する材木市場(左)と森林で間伐作業をする。左から堀川さん、森さん、本山さん。右は案内してくれた田村森林整備部長







0本ずつ2年間植樹していく。全国でも珍しい栗を使った焼酎を作ればと齋藤さんは夢をはせる。

### 一本の木も無駄にしない！ 全国から注目される集成材工場

大正町森林組合では、間伐材を100%活用しようとして瀬里地区に集成材工場を建設した。木片一つも無駄にせず、木目の美しさを最大限生かして、通常の板の倍の強度をもつ板が製造される。試行錯誤を重ねながら特注して製造した環境にやさしい最新器機類を配した工場は、全国的にも屈指だということで見学者が多い。

同組合の名物工場長兼営業部長の竹内純純さんにお話を聞いた。

「ものづくり、家具づくりをしています。捨てるものは何もない、いままで棄ててきた間伐材でヒノキ風呂風の家（樽ハウス）をつくらしたり、福祉関係のリハビリ用の小物も各種開発しています。最近では新国立劇場のフロア用に厚さ3cmの板を5000枚届け、府中



体験学習をする大正中学の生徒たちを指導する竹内工場長

競馬場の屋根も当工場のヒノキが使われています。東京都から木材を送ってきて集成材にしてほしいと依頼してきます。ここはお荷物だった、いまままだお荷物ですが、光が見えてきました。

コクヨさんは展開が早い、社員が5000人いて全国を網羅しているので、熱心で品質にも厳しいですが、その分我々もいいものを作れる。すべてが注文を受けて作るオーダーメイドですが、独自の商品開発にも取り組んでいます。間伐材の全国一のワークショップになりたい、他の国産材も活用しながら家の建築を丸ごと請負うのが夢です」

いい集成材をつくる、そのポイントは乾燥に時間をかけることだという。乾燥室の燃料にもヒノキの端材を使っている。ヒノキオイルはヒノキの葉や茎から採集するが、虫よけ効果があり、化粧品としても注目されている。

工場を見学させてもらった。この日は大正中学校3年生の体験学習が行われており、木の節目にカッターを入れて削ぎ取り、パテを塗る作業に挑戦している。「いい匂いがして、木っていいなと思う」「全部機械化していて、将来こういところで働きたい」と言う。

機器類はすべて特注したもので、さまざまな種類の木片を繋ぎ合わせて接着、圧縮して集成材にするライン1台が6000万円という。繋ぎ合わせたものを3〜4cm幅に輪切りにしたものが板として完成する。強度は普通の板の1.7倍。無垢のまま納品し、

木工加工所がテーブルや椅子等につけて仕上げの塗料を施す。

「子供用デスクの製作ではコクヨさんと研究を重ね、今では4Hの硬い鉛筆でも表面に跡がつかない。接着剤なども環境にやさしいモノを厳選していますから、シックハウスやアトピーも大丈夫です」と竹内工場長は自信を見せる。

器機の配置等に併せて増設した工場群の外観は決して立派ではないが、中は整理整頓されて清潔で、寸法に併せて切断した板はベルトコンベアで次の建物へ運ばれ、最後のチェックが社員たちの手で行われていた。

運営協議会開催のために出張先から帰社した山本静男組合長にも慌ただしくお話を聞くことができた。長年森林で働き、若い担い手を育成し、平成6年から組合長に就任した。

「組合員のために働くのが我々の仕事の基本ですが、木材が安いので、それだけでは潰れてしまいます。といて一般企業なら利益追求の経営が出来ますが、森林組合としては利益を上げ採算を取りながら、森を保全して河川や自然環境を保全していく役割を担っています。コクヨさんとは地域との関係を大切にしながら協議を進めてきました。これ程の企業は他にないでしょう。森林経営の質を高め、地域社会に貢献していくという林業の基本を、コクヨと真剣勝負で取り組んでいきます」と語っていた。

・FSC認証 世界的に活動する森林管理協議会（本部/ドイツ）の森林認証制度で、認定には森林管理のためのFSC10原則に基づき適切に管理された森であることが審査され、認定地の林産物から出来た商品にはFSCのマークが付けられる。「結の森」は昨年認証を取得、FSCモデル森林となった。

集成材工場内部







# 食農の夢を育み、地域産業の一翼を担う

町立東藻琴高校の取り組み (北海道大空町東藻琴)

地域と深く連携しながら数々の活動を行っている東藻琴町立高校（現在は大空町立）。東藻琴特産品のチーズ類は高校の食品実習室で生まれたもので、いまは生徒が農畜産物の加工実習で手づくりする豚肉のソーセージやベーコン、温室で育てた花や苗が大人気だ。



フレッシュマーケットで賑わう花卉売り場



生徒手づくりのウインナーやベーコン等の商品

”行列のできる店” 東藻琴高のフレッシュマーケット

6月30日(土)は東藻琴高校主催の「フレッシュマーケット」開催日。あいにく雨の降る寒い日だったが、9時のオープンを待つ人の列が40、50人続いた。

生徒と先生がこの日のために用意してきた手づくりのソーセージ・ベーコン等の畜産物加工品、温室で育てた花卉、畑から朝摘みしてきた春野菜などを販売する。この「フレッシュマーケット」は町内外の住民に人気で、天気の良い日は校庭が埋まるほど行列が出来る、200人が来校する。特に人気のソーセージやベーコンは冷凍ストッカーに山積みして用意するが、20分ほどで売り切れることもあるという。

今年は、一昨年より製造して町民に試食し

てもらい「旨い」と認知された鶏肉のソーセージの薫製、「青しそ入り白樺ドリンク」が新製品として加わった。

この飲料水は、堀江先生が開発、学校の敷地内にあるシラカバの樹液を利用したもので、樹液は雪解けから葉が出る春の数日間しか採取できないが、アミノ酸やミネラル類を含んだ化粧品にも使われる水。これにシソの風味を加えた爽やか飲料で、1本150円で販売した。100本用意したが、1時間程で完売。ラベルもケースも用意されたので、今後は町の物産展等で販売されることになりそうだ。

畜産品コーナーでは、「東京にいる娘や孫に頼まれて、何時も一番乗りでくる」というお年寄り、「親しい客だけに出す」という食堂経営の男性、「ここのベーコンは美味しくて炒めると子供が野菜もよく食べてくれる」という若いお母さんなどが買物籠にベーコンやウインナーを山盛り購入して行く。昨年から登場した鶏肉製品も価格が少し安くてヘルシーだとよく売れている。

そんな客に、朝早く登校し準備してきた二年生たちは「おいしいですよ」「ありがとうございます」と元気に声をかけていた。

園芸部門にも人々が押しかけ、野菜や花の苗を求めたり、温室に行つて鉢物をかかえて来て清算している。どのハウスにどんな植物





マーケット開催にむけて野菜を集める生徒たち。上・中央／竹内洋史先生  
下／シクラメン用土づくりをする男子生徒



手入れしながらきれいに使われている木造校舎と校庭

があるかを知っている人が多いようで、普段から出入りして、職員から植物についてアドバイスしてもらっている。

フレッシュマーケットは年5回開催され、他に11月上旬には収穫祭があり、クリスマス用のシクラメン等がよく売れる。シクラメンは生徒が2年かけて育てたものだ。

今回は一般人は出入りできなかったが、バイオ栽培室では能祖一広先生が、ランやメロンの水耕栽培に取り組んでいる。町から教育委員会に出向という肩書きで20数年、生徒の実習指導に当たると共に、植物の開発研究を行なっている。「いまはバイオテクノロジーを活かした花卉や果実の研究に力を入れています。冬期も付加価値の高い農産物が生産できればと、地域の農家からも期待されているんです」と言う。

### 地域の人たちと交流しながら

昭和28年に道立東藻琴定時制高校は、若者の農業慣れや定時制への敬遠から道から廃校が打診されたが、旧東藻琴村の住民から存続



を求める声が高く、32年に全日制の村立高校として運営していくことになった。村長が校長に、生徒の実習指導にあたる職員を村から出向するという方式を取ってきた。昨年女満別町と合併して大空町になったが、その機構はそのまま新町に引き継がれ、地域の高校として重要な役割を担っている。

東藻琴高校は農業を学ぶ定時制課程(昼間)で、農業高校の中では生産科学科という他校にはない科を設置し、草花、花卉、野菜栽培から肉乳、農産加工製品の生産から販売までを学ぶ場になっている。3年間で卒業できるが、4年に進級すると町の助成を受けて国内外にホームステイして専門的に学ぶことができる。定員は1学年40名で今年36名が入学、4年生は1名。最近3年で卒業し大学へ進むケースが増えてきた。先生は教諭、実習職員、事務職員、講師等24名で、1/2が道派遣の教諭、1/2が町の職員(臨時、委託含む)という構成になっている。

それにしても高校らしくないシックな校舎で、道路脇から校庭まで季節の草花がきれいに咲き、校内も清潔で美しいのは驚かされた。

柳谷郁雄教頭先生は「学校の入口に『耕心』という石碑があります。が、当校の校訓は、草花や野菜などの「農」や「食」を通して思いやりや遅く生きる心を耕していくこと。私



は札幌の高校から赴任してきましたが、ここは素晴らしい学校です。花を育てる、収穫するといった農業実習は人間性を育てる。生徒の中には不登校だったり問題児だったりした生徒も入学してきましたが、皆社会性と専門性を身につけ、人間的にも大きく豊かになって卒業していきます。都市部の高校に比べると地域との関わりも大変密で、例えば、ピーマンの苗を小学校へ持って行って子供達に育ててもらい、収穫したものは生徒が『おいしいよ』と言っていろいろ調理して食べてもらう、幼稚園児を招いて芋の苗を植え秋には収穫して試食会を開く、養護学校の生徒と花を植えて花壇をつくる、お母さんたちにもソーセージやチーズの作り方教室を開くなど、交流活動がいっぱいです。これらの活動が評価され昨年は北海道花いっぱいコンクールの最優秀校に選ばれました」



乳酪館で販売しているチーズ等の乳製品と恩田館長



昭和54年に東藻琴高校の食品実習室で研究開発されたナチュラルチーズは、56年にテスト販売されて話題となり、翌年「東藻琴村乳製品加工研究所」が出来て、村の特産品として売られるようになった。高校とはさらに研究開発してカマンベール、スモークチーズ等も登場、現在は「ひがしもこと乳酪館」を開設して販売している。同館で人気の「森のく



開店から1時間、商品も残りすくなくなつた。左から堀江先生、柳谷教頭、秋山先生と生徒たち



バイオ温室でメロン栽培をする能祖先生



コンピュータの導入も道内で早かつた



フレッシュマーケットに買物にきた住民たち



山下英二大空町町長

大空町には全日  
 制の女満別高校も  
 ある。  
 卒業生の一人、  
 東藻琴で農業をす  
 る土肥武史君(22)  
 が学校へ来てくれ

町立東藻琴高校について山下英二町長は「実際には少子化が進み、道では学校の再編を検討しています。しかし私は、学校に魅力があり、通ってくる生徒がいる限り存続していくつもりです。自分の手で土や植物にふれて育て学んでいくことで、命の大切さや他人への思いやりを身につけ、社会に適応した青年になっていきます」と言っていた。

### 社会性を持つ青少年の教育の場に

で、地域のこともよく考えてくれています」と言う。乳酪館ではチーズ造りの製造室を見学し、さらにチーズやアイスクリーム造りを体験する体験交流室も設置され、町の人気施設の一つになっている。

館長の恩田政雄さんは「東藻琴高校には研究熱心な優れた先生が多いんです。しかも町立高校で町から派遣されている方もいますの

た。高校では4年に進級し、ニユージーランドの農家に3か月間フアームステイした。「子供が二人いる4人家族の家で、りんご果樹園を4ha営み、豚50頭、羊20頭、それに子犬やダチョウ、エミュー、ロバ、馬などペットの動物がいっぱいいて、僕の日課はベットの餌やりからはじまる。終ると家の中の掃除をして、豚の餌やりが午前中の仕事。家の改装、羊の毛刈りなど何でもやった。言葉のハンデイはあつたけれどジェスチャーや片言の英語で通じた。あの体験は一生の宝物です」と言う。

家は40haの専業農家で、父親を手伝いながらビート、小麦、じゃがいも、他に南瓜やごぼう等を栽培している。「農業は天候に左右されやすく、最近では高温高湿の異常気候が続いており、病害虫が発生しやすい。できればさらに耕作地を広げて安定経営をめざしていきたい」。

高校に対しては、トラクター等の農業機械も導入してほしいと語っていた。



卒業して農業に励む土肥君(右)と生徒の国内外研修を記録した冊子







### 神々が宿る古座川の渓谷

司馬遼太郎は、古座川渓谷の雄大な自然と日本の農村から失われてしまった風習を求めて古座川町に何度か足を運んだ。「街道をゆく 熊野・古座街道」のなかで古座川をこのように書いている。  
熊野では、浜からわずかに山にはいっただけで、海の匂いが絶えてしまう。

古座街道の場合も、そうである。周参見の浜から周参見川の溪流ぞいに二、三キロも入れば鬱然とした樹叢で、梢にも根方にも太古の気がひそんでいる。杉の木が多いが、若い杉にまでなんだか霊気が湧いているようで、中世の熊野信仰のおこりは、存外こういうことが要素のひとつになっているのかと思われる。」

熊野の中央に位置する大塔山（標高1128m）を源とする古座川は、上流域では人間が近づくと拒否するように巨岩や奇岩が屹立ち、中・下流域では生物が豊かに生息し、それを糧とする人々の暮らしを支える総延長約60kmの川。この川に沿って国道371号が走り、道路沿いやなだらかな斜面に集落を形成している。

## 秘境・古座川渓谷の自然と共に

### ふれあい拠点「ふるさと定住センター」

### 平井ゆずの里

（和歌山県古座川町）



▶上から、一枚岩を望む古座川、柚の実、平井ゆずの里の商品、鳥害を防ぐための作業

巨岩奇岩が屹立する深い森の中を悠然と流れる古座川。この南紀の神秘的な自然と穏やかな風土に惹かれて古座川町を訪れる人が増えている。町内には田舎暮らしを支援する県立「ふるさと定住センター」があり、農業体験講座を実施。

一方、秘境の山間集落には山里が育んだ柚を活かして年商1億円以上の商品を販売する女性たちの職場がある。「古座川王国」は自然と人、生き物たちが凛として迎えてくれた。

### 田舎暮らしする人を支援する

### ふるさと定住センター

県立「ふるさと定住センター」は、町の東部、古座川に注ぐもう一つの川、小見川下流の台地にある。元は山間部の農林産物の研究機関で、平成14年から山村体験研修機関とし

司馬遼太郎が古座川出身のKさんに誘われて古座川町を訪ねたのは、もう30年前のこと。いまは道路も住宅も格段に整備されて快適になったが、当時「鬱然とした樹叢」と見えた森は、木々がさらに枝を張り空に伸びて人跡未踏となり、霊気で覆われ尽くしているようだ。子供の元気な声や野良仕事をする人の姿が少ないので、余計そう感じるのだろうか。





ふるさと定住センターの農場で。左から谷副主査、那須主査、長井所長、役場産業振興課河口専門員



て、市町村や地区住民と連携しながら、山村に移住してきた人や、移住を希望する人々の相談や農林業の指導に当たっている。

約1・5haの敷地には、年間約50品目の果実や野菜を栽培する畑やハウスがあり、その中央に研修・事務棟がある。ふるさと定住センターで行なっている講座は、座学とセンター内の農場で圃場の基本を学んだあと、エターナーの暮らしが地区を訪ねて農林業を体験したり懇談する3日コース（延長受講も可能）、受講者の希望で3日から1週間ほど自由に受講できるフレキシブルコース、定住相談と現地見学を主とする1日コースなどがある。定員は各5名程度、受講料は無料（交通費、宿泊費、食費は自己負担）。

長井幸一センター所長は「和歌山県では紀美野町、有田川町安諦地区、日高川町、田辺

市、白浜町日置川地区、古座川町、那智勝浦町色川地区が「わかやま田舎暮らし」を推進するモデル地区になっています。古座川町は、地域全体で定住者の受け入れに熱心な町で、自然環境は抜群です。京阪神からも中京からも地理的には不利ですが、田舎暮らしをするにはいいところです」

それを受けて、役場産業振興課河口専門員は「本町には定住セ

ンターがあるので、エターナー希望の人にも親しみやすく、20戸程が移住してきています。移住したいという問合せも増えていますが、仕事等のお世話も必要で、即どうぞとは言えません」と言う。

受講の受付や相談窓口を担当、今回の取材の手配もしてくれた那須淳人主査は「昨年より現在の業務を担当しており、他府県の方と接する機会が多く、皆さんから和歌山についていところだと言われます」

研修は現在月1回程度、土日を入れながら実施、フレキシブルコースも月1回開催している。地域の現場へもよく出かけるが、役場や地区の人たちの協力が欠かせないようだ。

ふるさと定住センターの職員は一般事務をいれて8名、農場での圃場整備や野菜づくりもあるため、結構忙しそうだ。

谷清次副主査の案内でセンター内の農場を見学した。柿、梅、柚、柑橘類など実の成る作物が多く、他にブルーベリー、メロン、ぶどう、あけび等を栽培、加工についても提案している。低農薬・無農薬で栽培された野菜や果物は町内で市販される。青い大粒の実をつけたハウスの柚も間もなく店頭に並ぶが、数量が少ないのでたちまち完売になるようだ。「少量多品目で年間を通じて収穫できるように計画的に栽培しています」と谷さん。

### 県内有数のゆず生産・加工所

ふるさと定住センターからクルマで約40分、町の最北端に平井地区・ゆずの里がある。古座川の源流に位置する80戸160人が暮らす山間集落で、昔から斜面を利用して柚が生

産されてきた。

この柚を生かして柚ジャム、マーマレード、柚飲料、シャーベット、ゼリー菓子、柚味噌、柚こんにやく等12品目を作り、一般小売店、旅館、量販店で販売する他、郵パックで個人やイベント会場へ直販している。他に地元のもの食材を使って、仕出し弁当や田舎味噌、餅等も作られている。年間販売額は昨年（18年）ついに1億800万円となった。

平井地区の柚との関わりは古い。昭和51年に柚生産組合を結成、58年には柚搾汁加工所を建設して柚果汁の本格的生産を開始した。

しかし果汁をしぼった皮が田畑に沢山破壊されることから、皮の利用法はないかと主婦たちが検討するようになった。60年に組合加入農家の女性20人がゆず平井婦人部を結成し、皮も果汁もいかしてジャムやマーマレード、柚ぼん酢等の生産に当たって来た。

婦人部結成から19年、順調に売り上げを伸ばしてきたが、世代交代の観点から法人化を検討。平成12年に生活改善グループ「平井友の会」も加わって味噌製造も始まる。平成16年4月農事組合法人「古座川ゆず平井の里」として再スタート、加工所を新設、最新機器を導入した。法人化では、住民62名が出資し（出資総額978万円）、現在22名が従事している。U・エターナーしてきた若者の職場になつており、美人で若々しい女性が多いのに驚かされた。最年長は地区で柚開発をしてきた74歳の女性だという。

理事長は地区長の新谷稜助さんだが、総務や営業の総括責任者は倉岡有美さん。古座川町役場産業振興課で13年働いたあと退社、ゆ



平井ゆずの里の皆さん。  
清潔で近代的な加工所で  
製造される。左は総括責  
任者の岡倉さん



「40分かけて通っています。ここの柚商品が人気があるのは、この地区で採れた新鮮な柚を新鮮なうちに一次加工し、昔と変わらない製法で手間をかけて商品化しています。自分達が一番いいと感じる原材料を使い、子供や孫に食べさせたいものを作るのが基本です」と倉岡さんは言う。7年前からモスバーガーの南近畿35店舗でゆずドリンクを販売してき

ず工場設置に伴い就任した。

平井の里で初心者を対象に募集したんですが、まかないきれないので5人は別の地区から通勤してきています。私も30



ある。高さ100mの一枚の岩が幅500mにも連なる勇壮な景観で、最近では観光バスも押し掛けるようになった。川辺に立つと気が感じられると言われ、室實信さん(元役場職員)がほら貝を吹いて観光客を迎え、岩の神秘性や司馬遼太郎が驚嘆した話などをする。一枚岩を望む場所には「古座川街道やどの会」が運営する「一枚岩庵鳴館」というレストラン兼物産売店がある。厨房・売店で働く田中哲夫・三千代夫妻は、南紀の自然の不思議さと歴史の深さに魅せられて4年前に大阪から移住してきた。

だが、昨年からイオンや三浦屋でも取り扱ってもらうようになった。ただ今後問題なのは、柚の木の不足です。私たちも樹木の手入れや管理に力を入れているのですが、生産量を増やすために新たな植樹が急務で、町にも相談しているところですよ」と語っていた。

2〜3月の暇な時期にはシフォンケーキなども作りたい、町のどこかに直売店を設け、女性たちの交流の場になりたい等々、倉岡さんたちの夢は尽きない。

深谷には巨岩奇岩がいっぱい

巨岩奇岩が各地にある。永い年月をかけて大地と水と風が削り上げた芸術品、地球の摩訶不思議さにあふれている。

ゆったり流れる古座川の中流域には、三セク運営の宿泊施設「ぼたん荘」があり、夕食には川で取れた沢カニ、ズガニ、鮎等が膳に彩を添えた。朝は漁師が天然ウナギを捕っている。清流は生き物たちの豊かな生息地でもあるのだ。

農作物を鳥獣被害から守るために

翌日の土曜日は鶴川集落に午前9時集合、ふるさと定住センターの指導で、移住してきた人と地区の長老たちが交流しながら、畑に鳥獣から栽培中の野菜を保全するためにネットを張る作業をした。鶴川集落は役場産業振興課河口専門員が住む地区で、河口さん親子は近所の農家から休耕地を借りて、研修用の畑として野菜を栽培している。キュウリ、ス







◀ 定住センター谷さんから野菜づくりも学ぶ

- ・ふるさと定住センター ☎0735-78-0005
  - ・古座川町役場 ☎0735-72-0180
  - ・平井ゆずの里 ☎0735-77-0123
- URL <http://www4.ocn.ne.jp/~yuzusato/>

イカ、トウモロコシ等が順調に伸びて、実をつけようとしている。それを待っていてカラス、イノシシ、鹿などがたちまち畑に侵入してくる。

河口さんの父、祐三さん(78)は「ここは休耕田だった。休耕田は3年したらアカメカシワという草が茂りイノシシの遊び場になってしまいます。田んぼも狙われるので、田植えが終わったらすぐ柵を設置します。野菜づくりではマルチ栽培が欠かせません」

そして「鶴川は以前は20町歩あり、水田も23戸が作っていたが、今は7戸となっていました。周辺の山も間伐や枝打ちをしなくなったので下草が生えない。そのためイノシシや鹿は里へ出て農作物を喰うんです」と嘆く。

農業指導員の仕事をしてきた祐三さんは、アメリカへも出かけて学んできた。日本で山間部の農業を維持するためには、農業の担い手を確保してきめ細かに対応していくしかない。

鶴川地区区長をする南和千代さん(70)は、新宮市の警察署に勤務していたので官舎に住み土日に帰って農業をしてきた。定年後は健康と自然に親しむために野良に出る。

「百姓は本当に大変ですわ。子供の頃からそう感じてきました。今は作物や野菜をイノシシなどから守るための作

業が増えましたから」と言っ

どないため、定年を迎えた人たちが頑張るしかないのが現状で、この日は千葉からリターンした的場靖さんも参加した。

「帰郷して5年になります。ここを都市からきた若者や子供達の農業体験の里にしていきたいと皆で話しているのです」

定住センターの谷さん、那須さんが、トラックからパイプやネットを畑に運び込み、説明のあと作業が始まった。手入れの行き届いた畑で野菜の成育状況や防害獣の作業を学ぶのは初めてと、移住してきた人たちも熱心に作業に参加する。

千井美代さん(33)。5年前に京都から移住、ご主人は森林作業員として山で働き、美代さんは役場で事務補助の仕事をしていた。「古座川の大自然に魅せられて移住してきました。農業はプランター栽培で野菜を少し作っている程度なので、畑で手間をかけて育てる野菜をみると勉強になります。農業は大変なのですが、できたら私たちも手伝えるようになりたいと思います」ご主人は山で作業があるため参加できなかった。

黒沢和寛さん(25)は「大学時代に熊野に惹かれてやってきて、古座川と出会いました。とにかくこの町の自然と人が好きです」という。大学時代の彼女も来て結婚、子供も出来た。役場職員として働きながら、野菜づくりを勉強中である。

昨年秋に夫婦で移住、今は町営住宅に住みながら自然散策を楽しんでいる田能毅さん(63)は「佐田で農地を借りて野菜づくりをはじめましたが、時期も悪かったのでキュウリが1本採れただけでした。これからは性根を入れてやりますよ。でも鳥獣対策にはお金もだいぶかかりそうで大変ですね」と、谷指導員から機材の値段を聞いていた。



イノシシや鹿などの獣害を防ぐためにすでに電気柵を設置しているので、今回はガラス等の鳥害対策。まず高さ2m以上ある支柱パイプを野菜畑の回りに2m間隔で打ち込む。「キュウリは2mまで伸びますから、杭もそれを越える高さが必要です」と谷さん。そのあと畑の中央に高さ3mのセンターポールを打ち込み、そこから釣り糸を各支柱に張っていく。支柱の外側にもネットや糸を張る。ちなみに機材の価格は、ポールが1本5000円、糸は釣り糸1巻で間に合うだろうと谷さんは言う。

作業が一段落したところで休憩タイム。皆が集まって冷たい飲料水を飲みながら「こういう機会をときどきつくって、またお喋りしましょう」と言い合った。

農家と移住者が鳥獣防止ネットを取り付ける作業。休憩時には話がはずむ





# 「ものづくり」仲間が集う高原の里

## 開田高原が移住者に人気の訳（長野県木曾町開田高原）

木曾のシンボル御嶽山の麓に広がる高原の村、開田高原（旧開田村）では、気がついたらウーザーが3000人近くいて、人口は20000人前後と横ばいを維持している。村が移住や定住を促す施策を特に講じていないのに、毎年5〜6組前後の人が移住してくる。その理由は何だろう、どんな暮らしをしているのだろうか、役場の一職員がインターンしてきた人を訪ね歩いた。見えてきた開田高原の魅力と、移住者のアイデンティティ。「でぼら」編集部も一緒に訪ねて、開田高原の人と自然を探訪することにした。

### 移住者が増えて人口減少に歯止め

木曾町は平成17年11月に木曾福島町、日暮村、開田村、三岳村の4町村が合併して誕生した。合併により47.6kmという県内最大面積を有することになったが、95.4%が山林という山間地域である。木曾川に沿ってJR中央線と国道19号が走り、中山道の宿場町が点在する木曾地方は、いま全国から観光客がやってくる。新木曾町の中核となる木曾福島は、木材と木曾伝統の木工品の町として木曾谷の中心的役割を持ち、木曾福島の北部にある日義も街道沿いに市街地を形成し、人口も比較的多い。

そんな中で三岳と開田は御嶽山の麓にひろがる山間地域で、標高も高いため、木曾福島に比較すると冬の気温は5度以上低く、積雪も多い。人口は30年間で徐々に減り続け、三岳、開田とも遂に2000人を切った。しかし開田はその後横ばいを続けながら僅かに増えてきて、平成19年現在2000人を維持している。また、地区内には別荘も約500戸あり、これを「交流人口」として加えると、

夏場はさらに人々で賑わうことになる。人口の増加をインターン者にあると思っただ企画調整課長補佐の大目富美雄さんは、改めてインターンしてきた人を訪ねて、開田高原に移住してきた理由、出身地や仕事などについて調べることにした。すでに親しくしている移住者もいたが、プライバシーの問題もあり今まで行政的立場で調べることはしなかった。

大目さんは旧開田村生まれ、高校卒業とともに村役場に勤め、あらゆる部署を担当、社会教育活動や消防団活動にも積極的に取り組んできた有名人。合併して木曾町になったのを機に、信州大学大学院経済・社会政策科学研究科に入学し、役場を4時に早退し松本校舎へ通学するという生活を2年間続けてきた。現場と関わりながら30年間取り組んできた地域問題を、さらに専門家等と交流しながら理論的に考察しようという意図だった。インターン者を訪ねてインタビューしたり分析したデータは、大学の研究論文としてもまとめている。

### 御嶽山と木曾馬のいる風景

そんな開田がなぜ移住者に人気なのか。大目さんがまず案内してくれたのが開田高原。霊峰御嶽山（3067m）を目の前に望み、手前には草原が広がり、そこに木曾馬が放牧されている。目の前に

標識、看板は自然景観を配慮して木製







▶ 開田高原より御嶽山を望む(右)  
高原に放牧されている木曾馬(左)  
◀ 右/「一本木亭」原田支配人、名物の高原蕎麦と蕎麦まんじゅうを持って  
左/木曾馬に魅せられて移住してきた宮川祐二郎さん

集落も美化や休耕地の整備等を行ない、公共施設の建設では、伝統の「切り妻」に統一、13m以上の建物を立てない、色は自然とマッチする等を取り決めている。「日本で最も美しい村」宣言をすることで、地域に誇りを持ち将来にわたって環境保全に力を入れてい

樹齢100年余のナラの樹が一本立つ。「開田高原は平均標高1100mあり、住居も多く開田高原保健休養地(別荘分譲地)のある恩田集落は1300mをはるかに超えます。でも、木曾谷が急峻な地形が多い中で、開田はなだらかに起伏する平坦地で、御嶽山がどこからも見えます」  
高原に多い白樺やカラマツに加えて広葉樹が多く、この季節は山も里も緑が特に美しい。ただし年間平均気温は8度、真冬はマイナス15度〜20度になることもあるという。  
開田は昨年10月NPO「日本で最も美しい村」連合に加盟、認定された。昭和47年にすでに生活環境保全と乱開発防止の「開田高原開発基本条例」を制定し、以後宅地開発やゴルフ場等の開発には自然保護と環境保全を最優先に取り組み、また

うという決意である。

集落を歩いていても、ゴミステーションは木製の洒落た囲いで目隠しされ、標識も木製の道路脇の道や空地には草花が咲き乱れていて美しい。大目さんは「移住してきた人は皆熱心に草花を育てています、我々もうかうかしていられません」と言った。

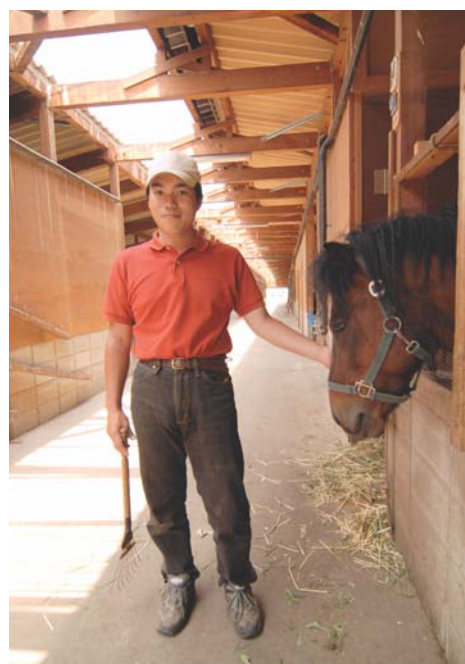
開田高原の景勝地を望む場所に「一本木亭」という開田の物産販売とレストラン(休憩所)がある。名物は、地元で栽培された高原そばと蕎麦まんじゅうで、木曾町の開田高原開発公社が運営している。

原田一善支配人は「木曾馬を見に来た人がこの景色を味わいながら利用してくれそうです。今までは冬は閉鎖していたのですが、昨年がら月2回お年寄りを招いて演芸等を楽しんでもらっています。レストランの床にホットカーペットを敷いて奥に舞台を造るんです。冬は名物のすんき蕎麦も美味しいですよ」

### 木曾馬に魅せられて

「一本木亭」から歩いて4〜5分のところに木曾馬たちの厩があり、現在35頭の馬が放牧されている。昔から山仕事や野良作業を手伝いながら、同じ屋根の下で生活を共にしてきた木曾馬は、とても人懐っこい。一時絶滅の危機を迎えたが、開田村の人々により保護育成され、その数を増やしている。  
開田には木曾馬の魅力に惹かれて移住してきた人が何人もいる。

宮川祐二郎さん(46)夫妻は熱的な木曾馬ファン。木曾馬牧場で臨時職員として働きながら自分でも2頭飼育し、2年前に牧草地を借



りて引き馬を行なう「木曾馬屋」を開設した。開田に来る前は豊田市のコンピュータ会社で働いており、休日は大桑村でテントを張って過ごしていたが、木曾馬を見てみようと思開田へやってきた。20年前のことだ。「なんてきれいな目をしているんだろう」と思ったと言った。その後現在の新牧場へ来て、人と同じやられて遊ぶ馬の姿を真近に見たことでファンになり、二カ月に一度から一カ月に二度開田通いをする生活を3年続けて、ついに開田への移住を決意した。馬を飼うためには技術を学ばなければと乗馬クラブにも夫婦で入会、朝から夜まで馬と接した。

自然が好き、動物が好きだった宮川さんは、今の生活に満足しているが、こと木曾馬のことになると少しうるさい。「できたらもっとと密に馬と接するのが理想です。餌はここでは一日2回ですが、家では4回与えて一緒に時間を楽しんでいます。引き馬はまだ商売にはなりません、定期的に通ってきてくれる客も増えて、開田の自然は素晴らしい、馬と歩

木曾馬乗馬センターの責任者・中川剛さん





山田貞夫さんのメタル  
アート「開田工舎」

くのが最高だと言ってくれます」

中川剛さん(30)は10年前から木曾馬乗馬センターで職員として働いている。岡崎市出身、市内の日本動物植物専門学院を卒業して開田へきた。村おこしイベントで同じ愛知県的女性と知り合い、結婚式では木曾馬に乗ってパレードした。2歳の女の子がいる。

「開田へは学院2年の時5月の連休を利用して牧場で実習させてもらい、以来休日になると出かけてきて馬の世話をしました。卒業して開田牧場で働きたいと村長に手紙を出したことから振興公社で採用され、もう10年になります。馬の世界に入ったのは調教をやりたいからで、当時は人が乗れる馬は6頭しかいなかったが、今は13頭はいる。馬車で場内を走るコースも出来て、馬に乗る人は年間1万2000人になりました。木曾馬は性格が穏やかで、粗食にも耐えて病気や怪我も少ないので、飼いやすいともいい馬、個人でも1頭飼っています」と中川さんは言う。しかし牧場の経営は厳しく、えさ代を除く

と調教に必要な道具はなかなか買えないのが現状のようだ。

牧場には連日のように、障害者施設の子供や青年たちが見学にくる。馬にふれたり走る姿を見て、目が輝き笑顔が絶えない。ここは訪れる人を心から癒してくれる場所なのだ。

### 村の鍛冶屋、高原のパン屋 「もろじくり」の仲間たち

末川髭澤集落の一番奥に「村の鍛冶屋」を自認する山田貞夫さん(63)の工房がある。木造のお洒落な建物の回りには鉄や木で造った動物たちのオブジェと山野草、家に入ると山田さん手づくりの作品がところ狭しと並び、まるで魔法の国にでも来たようだ。鉄や真鍮、合金等を主材料にして、テーブル、椅子、ランプ等がフクロウや楽器等をあしらって造られている。流木やガラス、石なども山田さんの手が入るとお洒落な作品に変身する。「今年は魔法使いをテーマに遊ぼうかと思ってっているんです」



京都市に家があり、教師をする奥さんは月一度訪ねてくる。山田さんは京都で食品やパントリー等のオートメシヨン機械の設計・製作の仕事をしてきた。100分の1ミリの精度が求められる仕事で、いずれ

「技術屋」でなく遊び心の「職人」としてのんびり生活したいと思っていた。開田には20年間ほど遊びに来ていたが、たまたま別荘を建築したのが移住できなくなったと売り出された家があり、気に入って購入、メタルアート「開田工舎」を開設した。移住して7年経ち、冬の厳しい寒さにも慣れてきたという。

「個展をやりませんかとお誘いもありますが、私は職人ですとお断りしています。ここへ来てもらいたい気に入ったものがあれば直接手渡したいから」という。客は100%口コミで各地から訪ねてくるようになり、中央の手製囲炉裏で山田さんと語るのを楽しみにしているようだ。

庭には作業用の建物があり、中には磨きこまれた精密機械がいろいろ並んでいる。遊び心いっぱいオブジェだが、大変精度が高い作品、その原点は鉄鋳物のことを知り尽くした技術職人だから可能であることが判った。

御嶽山がいよいよ目の前に迫ってくる西野地区に、石釜でパンを焼く岩崎宏さん(52)と初代さん(48)夫妻の「ダビダのパン」というパン屋さんがある。ヨーロッパで農民達が昔から食べていたという素朴なパンを、果実から培養した自然酵母、自然海塩、無農薬小麦を使って練り、手づくりの石釜でゆっくり時間をかけて焼いている。ダビダとは、聖書に出てくる海辺で暮らす女性の名前。東京時代に自然食のパンと出会い、空気のいいところでパンを焼きたいと二人は夢をふくらませた。ヨーロッパへも旅してきて、18年前に開田のこの原野を購入、自分たちで石を組み



石釜でパンを焼く岩崎  
宏さん「ダビダのパン」



毎週道路や空地の草刈りにやってくる平松利彦さん夫妻



鈴木正史さん夫妻と語る企画調整課・大目富美雄さん（左）

古材で工房兼自宅を建てた。

「標高1200mの高原で太陽と美味しい空気と山の清水、当時は電気もなくランブ生活でしたが、これがダビダの原点です。地域の人々にも支えられました。ここを皆が集まってホッとできる場所にするのが夢です」と岩崎さん。

客は工房まで買いに来てくれるが、宅配もしている。冬は雪も多くペンションの注文も減るため、スキー場がいいお客さんになる。今は10種ほど焼いているが、開田の素材を活かしたものをさらに開発中のようなのだ。

クルマがヒノキ林を抜けると、丘の上に一軒の家が現われ、夫婦で庭の手入れをしているのが見えた。「あの人が道路も空地も毎日きれいに草刈りしてくれる平松さんです」と大目さんがクルマを止めた。平松利彦さん（67）と綾子さん（64）で、愛知県の大府市

にも家があり、週4日は向こうで仕事、3日は開田で暮らしているという。「住民票は2年前に開田に移し、田んぼも3枚、裏の山も購入しました。自分でも気持ちよく過ごしたいから、道路から田んぼの土手まで草刈りするんです。ここは美ヶ原のイメージですね」

作業のあとは、手入れのいい芝生や木々を眺めながら、丘の家で至福の時を過ごす。イワナが産卵が上がってくる小川も目の前にあり、オニヤンマ、蜚、貴重な蝶等の生き物も豊富にいて、ときには熊も見かける。「だから最高に贅沢な場所です」と夫妻は言った。

岐阜県境に近い西野地区でギャラリーを営む鈴木たか子・正史夫妻の店を訪ねた。草木染めの布や手編みの洋服、輸入のアクセサリ等に加えて、手づくりのレターセット、陶芸品などが展示販売されている。料理も好きで、ペンションを経営していたが、ペンション

にはいま息子夫婦に任せられた。開田へ来て23年、孫も4人いて8人家族である。地域活動にも積極的に参加しており、ここは心地よく皆がお喋りに集まる場所にしたいというのが夫妻の望み。美味しい珈琲を煎れてくれた。

「つちのこ陶房」を営む鈴木光明さん（71）、政代さん夫妻は東京から5年前に移住してきた。野の花のリースをやっていた政代さんの希望で、森のある場所に家を建てた。植物に詳しく、フラワー教室の講師をしてきた。「高原の花は香りがよくリースにしても色が美しいんです」という作品は、東京や名古屋の喫茶店に置いてもらうことが多いという。サラリーマンを40歳で辞めて趣味だった陶芸を職業にしたというご主人の作品は、山野草を

活かすのにぴったりの優しさと素朴さに溢れている。夫妻のセンスを反映した家も庭も感動的な作品に見える。

地域おこしは「がったば会」で

最後になったが、開田でいま人気があるのが、地元の牧場から届



「つちのこ陶房」を営む  
鈴木光明・政代夫妻







美味しいと人気のアイスクリームを開発した松井淳一さん

工房を建てて本格的に販売をはじめた。山菜や山の果実を使ったものなど6種以上ある。開田高原の地域おこしグループには「がったば会」がある。「がったば」とは、地元の方言で「手に負えない腕白小僧」といった意味合いで、皆で元気に楽しく地域活動をしてい

いた牛乳で造った開田高原アイスクリーム。研究熱心な松井淳一さん(52)が開発してペンション「Jハウス」で出していたのが評判となり、仲間たちの支援でこうと20数年前に設立された。地元の人、エターンした人など20代から70代まで23人が入会、「がったば塾」を開いて勉強会をしたり、周辺町村から専門家や著名人を招いて講演会やコンサートを開く等の活動をしている。

呼びかけ人は大目さん、「酒が好き、人が好き、ふるさとが好きが入会条件です」という。実は大目さんは「木曾の宗猛?」と言われるマラソンランナーで、長野県西部地震で山崩れ等があり、木曾から観光客が消えた時は、「開田高原へいらっしやい」というキャラバンを組み、名古屋までの160キロを2泊3日でマラソンした。今年地元の中を卒業したサッカー少年の次男は、神戸の高校に推薦入学し、毎日グラウンドを走っているそう。大目さんも週末には10キロを走る。走っていると、自然や人、生き物たちがよく見えてきて、アイデアも次々と生まれる。今回の取材でも、開田をフルマラソンする勢いで、多くの人を訪ねることになった。こういう行政マンがいる町は住民も元気で、御嶽山も2日間快晴であった。

木曾町役場企画調整課 ☎0264-2214287  
開田高原観光協会 ☎0264-4213350  
<http://www.kaidakogen.jp>

文/浅井登美子 カメラ/小林恵

## 森林で心身をリラックス 全国の「セラピー基地」

森の中を歩くと心が安らぐ、森林浴は気持ちがいい等、森林が心身をリラックスしてくれることが科学的にも証明され、林野庁(財)国土緑化推進機構などが全国10数カ所を「森林セラピー基地」「セラピーロード」に認定した。

森林セラピー基地は、森林の緑の風景や香り、音、肌ざわりなどが心身にリラックス効果を促し、ストレスホルモンの減少などの科学的効果があると認定された地区。セラピー基地に認定された市町村では森林の保全と共に、宿泊・交流施設の整備、医師による健康相談コーナーを設ける他、2泊3日などの日程で体験メニューを用意している。

- 平成18年度までに「森林セラピー基地」に認定されている地区
- ・北海道鶴居村「鶴が舞い降りる釧路湿原―山崎山林」
- ・山形県小国町「白い森の国おぐに―ブナの森 温身ぬくみ平」
- ・長野県上松町「森林浴発祥の地―赤沢自然休養林」
- ・長野県飯山市「こころのふるさと―信州飯山 母の森、神の森」
- ・長野県信濃町「森林メディカルトリーナーと歩く癒しの森」
- ・山口県山口市「東大寺再建のふるさと―柚入りの地・徳地」
- ・宮崎県日之影町「自然の恵みが人を呼ぶ里―癒しの森」
- セラピーロード
- ・若手県岩泉町「早坂高原―森と水のシンフォニーいわいずみ」
- ・長野県南箕輪村「南みのわ―癒しの森」
- ・信州大芝高原みんの森

- ・長野県佐久市「癒しの森 healing」
- ・高知県津野市「天狗高原自然休養林」

○現在認定が予定されている地区―茨城森林浴の森 南飛騨広域森林保養園、愛媛森林浴88カ所、和歌山県高野町、島根県飯南町、高知県橋原町、鹿児島県霧島市、沖縄県国頭村  
森林セラピーポータル <http://forest-therapy.jp/>

## 知作・酪農の実習生募集 北海道天塩郡遠別町

日本の稲作最北端の地で、畑作や酪農が盛ん。農業実習生は原則3カ月以上で、町内の研修宿泊施設(バス・トイレ付き個室、自炊)利用。年齢は21歳から35歳までの男女。畑作ではグリーンアスパラの収穫作業や除草作業。酪農では搾乳や牛舎の清掃、子牛の世話等で、1日5200円の手当てが支給される。また、新規就農者の場合は一定期間研修を受けたあと酪農研修支援制度等を利用して独立へ向けてサポートしてくれる。遠別町農業委員会、農林課 ☎01632(7)2111

## 農家に宿泊して農作業 飯田市ワーキングホリデー

空明るく気候が穏やかな南信

州、飯田市(長野県)南アルプスを望む大地にはリンゴ、梨、桃等の果樹園が広がり、春秋に農作業の手伝いを募集している。4日間農家に宿泊して、仕事を手伝い、家族と一緒にご飯を食べて、田舎の生活を味わおうというもの。仕事はリンゴや梨の収穫作業、花卉栽培、野菜・酪農の手伝い等。真面目に農作業したい人で年齢は問わない。交通費は自己負担。問い合わせは飯田市農業課ワーキングホリデー事務局 ☎0265(2)3217

## 新しい旅のかたちを楽しむ 5地域で始まった長期滞在

地域の特色を生かして観光と交流、さまざまな体験が味わえる「長期滞在/地域コミュニティ参加プログラム」を、北海道中標津町、江差町、山形県西川



飯山市のブナ林



2007 in ふくおか

テーマ「ふるさとの価値を見つめ直す～自立と連携・交流による地域づくりの展開」



日時／平成19年10月24日(水)～10月26日(金)  
 場所／添田町黒木町、朝倉市、田川市、東峰村、星野村  
 ○前夜祭 10月24日(水)午後から添田町、黒木町の現地視察・意見交換  
 添田町「地域資源を活かした地域づくり」  
 黒木町「都市と一体になった自然を守る取り組み」  
 ○全体会 10月25日(木)12:00～朝倉市サンライズ本木  
 ・優良事例表彰式  
 ・基調講演／宮口侗 迪 (早稲田大学教授)「ふるさとの価値を活かした地域づくり」  
 ・パネレディスカッション  
 コーディネーター／菊池恵美 (西日本新聞社取締役編集局長)  
 パネリスト／薬野和泉 (由布院温泉観光協会専務理事)、関根千佳 (コーディネート社長)、名和田是彦 (法政大学教授)、武居丈二 (福岡県副知事)、守友裕一 (宇都宮大学教授)  
 ○分科会 10月26日(金)10:00～12:00  
 田川市「若者が住みたくなるまちづくり」  
 東峰村IT劇場「ITはおもちゃ?救世主?」  
 星野村「過疎地域自立活性化優良事例」  
 [問い合わせ 福岡県企画振興部地域政策課 ☎092-643-3213]

編集後記

今回は、地域づくりの仕掛人たちに多数会うことができた。アイデアと夢を持ち、行動力がある。現実的には悩みも多く課題も山積しているだろうが、遊び心で対応、地域の人や関係機関を巻き込んで、明るい雰囲気。その原点は「地域にはこんなに素晴らしい自然資源と人々がいる」ということ。そのことをUターン者に学ぶこともある。一方で「癒し」をテーマに自然賞歌の著書を書いたり、コンサート等をする新田舎文化人も増えている。「緑の風がどうの、癒しがどうのって都会の人は暇なんだな。ここへ来て草刈りでも手伝ってくれかな」と一人で竹藪の整備をする80歳の老人はつぶやいた。交流居住が高まる中、「移住してきたら地域の一員として共同作業に参加できますか」と問う自治体もあると聞く。  
 ■次号は、地方に伝わる郷土料理、地域の産物を活かした新料理や加工品を特集します。これぞ我が地区自慢の料理 人気レストラン等がありましたらご一報ください。(浅)

De POLA No.33

[でぼら] 2007年秋冬号

発行日／平成19年9月5日

発行所／財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号

第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい

編集工房アド・エー

町 山梨県北杜市、三重県志摩市が協力して実施している。地域ごとにコンシェルジュが客の要望に合わせてコーディネートし、滞在中もきめ細かくサポートしている。

例えば江差町コースでは、6泊7日で、歴史ある港町の観光や漁民・町民等と交流しながら、民謡の原点である江差追分の学習、百印百詩を振り返る篆刻体験、ヨット体験、味噌づくり、イカ売り、裂き織り体験等をし、他にコンシェルジュの案内で松崎をドライブしたり、周辺に沢山ある天然温泉めぐりがプランされている。宿泊は町内にある宿泊施設で1棟(定員4名・食事なし) 6泊7日で21000円(夏) 27000円(冬)。江差町役場総務政策課 ☎0139 (52) 6712

山の家等に宿泊して、月山のトレッキング、六十里越街道巡りの他に、こけし絵付け、和紙漉きとランブシエードづくり、山菜や野菜取り等を味わう6泊7日コース。宿泊費は朝食付き27000円、51000円。月山朝日観光協会 ☎0237 (74) 4119

中標津町/サーモンフィッシング、チーズづくり他。役場経済部 ☎0153 (73) 3111

北杜市/ハケ岳、清里をメインに。(財)キープ協会企画部 ☎0551 (48) 2169

三重県志摩市/英虞湾(天王崎)をメイン会場に。志摩自然学校 ☎0599 (72) 1733

世界自然遺産屋久島の自然体験セミナー

屋久島の世界遺産の森を訪ねたいが自信がない人には、屋久島環境文化研修センターが主催する自然体験セミナーがお勧め。屋久島の森や里歩きをガイドする他、季節の特色を生かした体験学習、地域との交流会を月1回開催している。19年度10月は6日～8日で屋久杉・照葉樹の森観察、11月は23日～25日で秋を感じる森歩き、12月は7日～9日で冬の世界遺産地域を歩く、1月は12日～14日で屋久島の昔話にふれ神秘的森を歩くコース。屋久杉の木エクラフト、スターウォッチング等もあり、一般人対象2泊3日コースが18000円(往復旅費は自己負担)。1日研修も可能。申し込み ☎0997 (46) 2900



情報、モニターツアーなどの情報を紹介しております。

ポータルサイト「交流居住のススメ」は、交流居住をスタートしようとしておられる方のサポーターです。田舎暮らしに興味があるなら、一度ご覧になってみては。素晴らしい日本の故郷がお待ちしています。

交流居住のポータルサイト 発信中!!  
<http://kouryu-kyoju.net/>

交流居住ポータルサイト「交流居住のススメ」では全国約500の各自治体が、田舎と都市を行き来するライフスタイルの情報を提供しています。生活関連情報、滞在施設、体験プログラム、その地での暮らしのノウハウなど、掲載プログラムは全国で約3000件。3種類の検索方法より、必要な情報をお探しいただけます。また、毎月第1、3水曜日にはメールマガジンを発行し、最新の田舎暮らし

交流居住 優良事例集 「田舎暮らしのススメ」

都市で生活しながら時々田舎へ行って、自然や土にふれたり地元の人や文化と交流する「交流居住」。そんな新しいライフスタイルの事例を紹介いたします。A4判80頁。お問い合わせは(財)過疎地域問題調査会へ。



せーふ

or

アウト

宝くじにもあります。

せつかくの当たりも、支払い期限を過ぎたら「アウト」。  
宝くじを買ったら、早めに調べて換金しましょう。

※宝くじ当せん金の支払い期限は、宝くじ券に明記されています。



宝くじの収益金は、身近な街づくりに役立っています。



財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。